女鑑

第六十三號

明治……月廿日發行

東京國光社

女鑑第六十二號目次

女鑑

太田垣蓮月



女鑑

理想と實驗

雲の往來は、日に幾千度なるも、水の流れは、日に幾千里なるも、人に於いて、將、何かあらん。唯、惑むべきものは、人情の變動なり。憂ふべきものは、世態の遷移なり。

「色見えで移ろふものは世の中の人のこゝろの花にぞありける」とは、實に、世態の實況を盡くせるものなりけり。斯かる世態を矯め正して、誠に厚き風俗を維持するを以て、人生當然の務とすべきなれば、人たるものゝ責任の難きこと、亦甚しといふべし。

人は、學問すれば、其の理想は、益、進歩して、宇宙の間の事物は、皆、其の胸の中に取り入れたるが如き心地するものなり。されど、斯かる理想と、事の實際とは、往々に差ふことのみ多きものなり。されば、必、理想を恃みて、實驗を忽にすべきことにはあらず。先、人事の實際に就いて、能く、學理の應用を研究するこそ、誠の道ならめ。これ、學理は、もと、實際の經驗より成り立ちたる方法なるは言ふまでもなければなり。

人に、親疎の別あれば、必、情に、厚薄あるは、自然の習なり。然れども、其の親しきものすら、久しきを經るに及びては、愛敬の禮、自輕くなり行きて、終には、あさましき有樣となるもの、世上一般の情態なり。これぞ、所謂、怠、敬に勝つものなるべき。

未、學問しつゝある時にありては、總べての事、皆、其の宜しき所を得て、眞の人たらんことを思はざるものなし。然りと雖、實驗の上に就いて、甚しき差異あるより、終には、其の元氣も衰へて、其の行も、自全からざるもの多き故に、苟にも、怠惰の念慮を起こさず、誠實の情義を篤くし、終始を一にして、時にも、勢にも、移されず、撓まれずして、偏に、斯の世の中に、信の人の道を弘め、最、順良なる風俗をして、永久に保續せしめんことを以て任とせざるべからず。これを、敬、怠に勝つものとはいふなり。

斯く、世の風潮の外に立ちて、能く、其の變化移動を制する力を養ひ、人の務を盡くし、移ろふ人の心をして、長に、其の美を保たしめんことこそ、學問に、身を委ぬるものゝ務といふべけれ。あはれ、世の諸孃、亦、此の大體に、心を注ぎ

給ひてよ。

論說

自安の心を去るべし

岩下方平

人の、常に憂ふべき所は、自足れりとし、自安んずる心を生ずるにあり。萬事を處するに、自信自重の心なかるべからざるは、固よりなりと雖、其の自恃みて、善く、其の愼むべき所を愼み、能く、其の行ふべき所を行ひて、毫の缺くる所なく、通せざる所なしとして、其の禮に悖り、道に違ふもののあることを曉らず、而して、自、妄に、己を信じ、自重んじ、事を決し、務に處するに當りて、敢て省みる所なきは、實に危き事にあらずや。

既に、學識を具へたるものすら、猶、思ひ誤ることありて、過失を引き出だすことあるを、況して、定まりたる見識もなく、動かぬ道理をも、能くも辨へずして、些計りの學問の力を恃みて、此の重要なる世務に與り、人事の處置を爲さんことを、最、畏れ愼むべきことゝ云ふべし。

抑、此の自安の心は、何に由りて生ずるものなるかを明にせんに、必、己を信ずるの篤きと、怠慢との二の原因あることを知るべし。己を信ずるの篤きは、信に嘉すべきことなれども、己に、信ずべきの德量なくして、唯、其の心にのみ任せて行ふは、最、不可なり 怠慢の心は、甚 忌むべく、惡むべき心なり。解し難き理、成し難き事に逢ひて、忽に、其の心を怠り、彼の事は、之にて足れり、此の事を處するは、斯くして、猶、不可なからんと。而して、其の巳を勵まし、難を先に

することを爲さず、却りて、已の才能を盡くすものとなし、自安んじて、遂に、過を改め、善に移ることを知らざるに至る。古人の、嘗て戒むる所、此の自安の心を去るを以てせざるものなし。豈、大に愼むべきことゝあらずや。

近來、婦女子の敎育を盛にすと雖、此の自安の心を生ずるもの益、多きを加ふるは、誠に、忌はしき事といふべし。人の良妻たり、賢母たるべき任ある婦女にして、未、嫁かざるに、既に、自滿自安の心を抱き、德を進め、能を盡くすことを爲さず、區々たる末技を玩び、齊家の要、家庭の務を忽にするもの、其の笑を、當世に取らざらんと欲すとも、豈、得べけんや。世の自安自負のもの、少しく省察する所あれかし。

女子處世論（四）

三輪田眞佐子

第四　先目的を定むべし

凡、身を立てんと願ふものは、先、目的を立てゝ、後、進むべきなり。世の、目的を、豫定めずして、世海に入り、宿志を遂げざりしを悔ゆるものあるは、自招く孽とこそ言ふべけれ。乃、幽閑の生活をなさんと欲するものは、俗塵を脱する僻地に、居を占めざるべからず。華美の生活をなさんと願ふものは、人馬、群をなす都市に、家を搆へざるべからず。是、各、其の目的に應じて、處置を異にせざるべからざる理を明かすなり。

女子も、幼より將來、如何なる人に嫁し、如何なる生活をせんかと、豫、其の方針を定めて準備せざれば、異日、悔ゆることを免れじ。而して、其の目的を定め

んも、過分の望は、願ひて能はざるものなり。されば、唯、願ひて能ふことを撰びて、目的となすべし。

目的を定むるに當りて、果して其の目的を達し得るか否かを卜せんとならば、第一、自家の地位を知らんことを要す。抑、何れの家も、祖先傳來の職業あり。交際あり。從ひて、其の分限に相應せる女業を修めざるべからず。然らざれば、桃の夭々たる、其の葉蓁々たるとき、嫁せんと欲せんも、適當の道あるまじ。若、嫁し得るとせんか、必、不似合のこと多かるべし。例之ば、父、學者なれば、其の家風、必、學者風なり。交際も、自、同類のもの多からん。さるに、其の女、學者の家に生まれながら、三味線の技ばかりを知るものありとせんか。行末、必、幸福の生活をなすこと能はざらんが如し。其の他、商家は商家、農家は

百姓、及、富は富、貧は貧と、各、其の地位と、分限とに應じ、適當の目的を定むべし。
第二、自分の天性を知らんことを要す。思ふに、維新までは、社會の階級、士農工商に分かれ、各、其の分限に應じ、子弟の身を處しけるを以て、天才の士女も、其の階級のため、有爲の技量を伸ばし得で、遂に國民一般の進歩を妨げたりし弊害ありしと同時に、利害相伴ふは、命數なるにや、四民、各、恒產を守り、定業に安んぜしを以て、狼狽に陷りしものは、少なかりき。然れども、今日は、個人主義の流行となりぬるを以て、天才の、士女の不平を懷きて呻吟するに及ばざるは、國家の慶事なりと雖、其の主義のため、自、才を測らずして、一身を過るもの少からず。見よ、驢馬は、何に鞭つも、千里の駒とならざるを。世

には、娘が天性上の適不適を試みで、女教師たらしめばや、將、音樂家たらしめばやと、遂に、其の一身を、失望と、憂苦との間に昏迷せしむるものあり。甚しき過になんある。されば、能く、世に、身を處せんとならば、自分の天性を知り、其の長所を利用せんことを以て、目的となすべし。是、万全の策ならんかし。「シドチー、スミス」曰ひけらく、好きこそ、物の工なれ。其の好まざることを修めんは、得策にあらじぞ。今日は、強、祖先傳來の定業を襲ふに及ばざらんも、唯、天性よな違ひそ。

第三、身よ伴ふ事情に適合せんことを要す。凡、人は、自然に從ふものは榮へ、自然に背くものは衰ふべきものなり。されば、目的は、必、女性に相應するものに限るべし。見よ、獨存して、政事などに奔走せんと迷ひし女子の終を能く

せしもの少きを。亦、身體の強弱を考へて、適當の家に嫁せされば、終生の安堵盡きなん。或は、兄弟の多少に從ひて、大に、目的を異にすべきなり。世に、獨娘にして、嫁せんと企て、兄弟多きに、婿を迎へんと謀り、遂に、進退谷まる結果を釀しゝ例なきにあらず。

おのれは、此の日新の世に當りて、猶、天下の女子をして、悉、饋食と、裁縫とに、一身を委ねて、餘力ありとも、他業にな從ひそと言ふを欲せず。唯、苟、女子たるものは、其の身分と、職業とに關せず、一般に通じて、内事を主り、其の餘力を以て、自分の地位と、天才とに應じて、或は、教師を事とし、或は、美術を修めんことなどを目的となすも妨なかるべし。而して、女子の教育は、各、其の目的に應じて異なるべきなり。こは、後日、女子教育論と題して詳論せん。

古人の言に傳ふ。苗にして秀でざるものなし。秀でゝ實らざるものなしと。實に、諸孃の精神一到しなば、何事か上達せざる理やはあるべき。唯、目的を定めんに、其の地位と、性質、及、境遇とに相應する事業を以てせば、多くは成就せん。否、必、困難のみは免れん。故よ、おのれは、敢て、一般女子に、此の標準を以て、世路の方向を決すべしと勸むるなり。されど、強、此の標準に從はさるべからずとせんか。勢、婦女社會の活力を鈍からしめん恐あるを以て、女子は、悉、主なる目的を、良妻賢母たらんと定め、從なる目的は、志あるものに限り、假令、農家に生まれしものも、文學者となり、商店に生まれしものも、美術家たらんも妨なかるべし。固より、以上の三條件に適合する目的を擇ばざる女子は、多少の困難を免れじ。故に、天性に反する乎。若くは、境遇よ違ふ乎。或

は、地位に適せざる目的を達せんと思ふ子は、堪忍以て、之を凌がざるべからず。凡、豫、覺悟せし困難は、之に勝ち得んも、意外の困難は、之に勝ち難からん。今日、有望の女學生、偉大なる心算を立てながら、宿志を遂げ得ざるものあるは、此の必要條件を、未知らざるものなるか。又は、必要條件の缺失より來る困難に勝ち能はざるものならん。讀者、心してよ。

目的を以て、單に、希望とのみ思ふものあり。これ、甚しき誤ぞ。抑、目的は、實行を尊ぶべきものなり。故に、前に述べつる三條件を具備せずば、行はれざることを希ひ、成らざることを望むなり。かゝれば、希望は、人をして救ふべからざる不幸の淵にさへ沈ましむる恐あり。こは、心、一度、空想界に逍遙せば、人生に於いて得べからざる希望を懷くべければなり。是を以て、未、世路に

經驗なきものは、自分の天才を考へず、地位を思はず、將、境遇を察せで、種々の非望を希望し、不幸を招くに至らん。否、天才、地位、及、境遇、各、其の宜に適へりとて、人生の命運には、極限あり。若、其の極限を慮らざるものは、猶不幸を免れじ。昔、小野小町は、其の才、其の美、無比にして、當時の名望高かりければ、我こそ、如何なる希望をも達し得るならめと信じたりけん、夙に、安心立命の道を定めざりしを以て、晩年、身を寄せんよ由なく、遂に、文屋康秀がさそふに應じて、「わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ」とさへ歌ひき。あはれ、彼が隆盛の夢も、其の頃に醒めけんぞかし。

されど、亦、希望ばかり、人生よ、快樂を與ふるものはあらじ。朔風、凛々として、骨髓に徹するとき、後園に立ちて、枯木を愛護する所以のものは、他なし。

春陽を待ちて、紅花の開くならんと思へばなり。實に、人生の萬事、希望ありてこそ、活動すべけれ。見よ、幼者は、成年の成業を樂しみ、成人は、老年の安堵を樂しみ、老人は、子孫、長に榮えんこともがななど、人生行爲の原動力は、概、希望にあらざるなきを。故に、正しき希望を懐かんは、至りて善し。されど、之を以て、直に、目的と爲よと論ずる次第は、元來、希望は、無邊無量にして、浮世にて達し得ざることさへ多かればなり。漢の馬援が、「畫虎不成、反類狗者也。」と兄の子を戒めたりしも、人、各、其の天性を守るべし。徒に、他人に倣はんと妄想するは不可なりとの意なりけらし。諸孃よ。おのれは、決して、多言を好みて、斯く喋々するにあらず。肺肝を吐露し、諸孃をして、世路に迷ふなからしめんと欲するになん。

史談

大田垣蓮月

鹽井雨江

近き頃、蓮月となむよぶ尼ありける。名のみきゝてだに、ゆかしく清げなるを。まのあたり見たる人、きゝたる人に尋ね、或は、ものゝ本に記したるを見るに、誠に容色の美しさは、蓮の花の露に濡れたるが、あしたの風に匂ひこぼるゝ如く、才操の、めでたくすぐれたるは、望月の隈なき光りの、すみわたりたるがごとありけり。實の名を誠子といひ、父をなむ大田垣光古といひける。むかし足利の頃、山陰山陽を、わがあしもとに踏みつけて、世に轟きたる山名といふ家の家臣にて、父の代までは、幾代幾年、久しく因幡の國なる鳥取といふ所に住みてけり。さるに、此の光古といひける蓮月の父なりける人は、よしありて故郷を離れけり。京に行きて、東山といふあたりに住みけり。京の東山、名にしおふ櫻の土地、花はづかしく、月なづかしき、蓮月は、此の名山此の花間に生れたり。

思へを、名山、何のゑにしありけむ。名花、いかなるゆかりありけむ。誠子は幼く

て、若草のにほひゆかしく、おひ立つまゝに、ます〳〵翠の遠山の眉すぐれ花の面かげつやゝかに、ゑめる紅梅の色香あふれ、語れる嬌鶯の艶こぼれ、坐すれる姫松の姿やさしく、行けば柳腰のけぶり見ゑけり。春にはうき立つ世のならひ、花には迷ふ人心、野邊にあらねど、花になけれど、誠子の家、あこがれまどふ人もありけり。誠子の美しさは、容色のみにあらず。心も又あはれに美しかりけり。文もめでたく、歌も堪能にて、大かたの女子に勝りたりけり。誠子の勝りたるは、才藻のみにあらず、徳も行も、又世のあだなる女子に似ざりけり。父をも敬ひ、母にもやさしう侍きて、たらちねの親の教の庭ならで、よその草木に眼をとめず、あだなる露に、心を結ばざりけり。

誠子の若きころ、母なる人は、むなしく流れの根をとゞめ、落花のあはれを遺したり。途にゆく道とはきけど、とまるは行くを惜しと思ふ終世の別離、ましてや孝女の悲嘆は、いかばかりなりけむ、げにや、大空のはてなく、流水の限りなき恨みなりけむ。

誠子の母亡くなりてより、父も、何となう秋風の露しげく、孤雁の聲かなしく、唯誠子といふ一本の忘草を、起臥の心やりとしたり。誠子も、又父のみの一柱を、わが家わが身の頼み所としたるが、媒なる人ありて、彦根の人なりける、近藤なにがしといふを迎へて、夫となしたり。

夫を迎へては、貞節も踏み孝情も忘れず。夫には妻の道、父には子の道、そむかじとのみ思ふが、朝夕の心にして、神に祈るも、佛に願ふも、書に問ふも、歌にいふも、唯これのみを心懸けたるか、もと天地はつれなきもの、人世は無情のものなりけり。誠子は幸なくて、子といふもの四人まうけながらに、四人を皆失ひつ。床の撫子、秋を待ず枯れ、はては何時何處、離れじと思ふ軒のつまさへ、無慘の風、何時しか影をとゞめず、わさちふが宿、又父のみの一柱となりけり。頼みと思ふ若葉は、末なくて散り、互に連ねたる枝は、無情の風に摧けて、はゝ木の幹、何にか怺へむ、誠子は、遂に緑りの髪と共に浮世を斷ちて、尼となり、蓮月となむよびけるは、誠子が三十あまり三ッばかりの時なりけり。

風のなげき、露のうらみ、限りなきもの思ひにさはれながらに、白菊のかをりは、

移りもやらぬ誠子の姿。なほあこがれて、密に軒の風、籬の露を、うらやましう思ふものも多く、文に人に、あだなる言を寄するものありければ、誠子は、いとあさましき事に思ひて、自ら太き秤もて、われとわが齒にかけて拔き去りて、迸る血に、赤き心の、外なる色に染まぬけしきを見せけれど、見たる人も聞きたるも、驚きもしつ稱へもしつ、又いひ寄る言も、誘ふ袖もあらずなりしといふ。

誠子が、四十歳をかりなりける頃、父なる人も、又歸へらぬ旅路に、浮世を去りぬ。誠子が悲嘆は、遂に限りなりけり。

　　つねならぬ世はうきものとみつ栗のひとり殘りてものをこそおもへ

と叫びて、又

　　たらちねの親のこひしきあまりには墓にねをのみなきくらしつゝ

といひて、床に坐りてなき、軒に立ちて泣き、天を仰ぎて泣き、墓にふして泣き、ひたなきに泣きしが、せんかたもあらず。岡崎といふ里に移りて、世外の風月を友として、世になき父母、わがせ、わが子をしぬびて暮らしぬ。此の岡崎にありける時の歌に、

岡崎のさとのねざめにきこゆなり北しらかはのやまほとゝぎす

冬畑の大根のくきにしもきえて朝とでさむしをかざきのさと

父の在りける頃より、家には貯へとては無く、心は世外にあれど、さすがにむくろの、此の世に在るものから、たづきなくては叶はねど、自ら埴もて、世にきびしよとて、茶瓶など造りて、おのれが詠める歌を彫みて、そを賣りて、朝夕のたづきとしたり。世にいたく珍重せられて、後には贋物さへ造る人あるに至れり。蓮月の名、蓮月の歌、蓮月の茶臼は、世に隠れ無くなりてけれど、世を捨てはてむと思ふ身の、なか〱に、世のまじはり繁くなるを、いたく思ひわびて、彼處に移り、此處に住み、おなじ里に、年を積まず、あまたたび住家うつしけれど、笑ふ人もありときゝて、

うき雲のこゝにかしこにたゞよふも消えせぬほどのすさびなり鳧

さそふ水あるにはあらでうき草のながれてわたる身こそやすけれ

といふ述懐などあり。後には、いよ〱世の中をわづらはしく思ひ、北山の奥ふかく、西賀茂といふ所の、なにがし寺といふ寺の、茶房に引き籠りて、

露の身をたゞかりそめにおかんとて草ひきむすぶ山のしたかげ

といひ、又出です。此の頃の閑居の作ならむ、

身ひとつの外にくまなすものはなし月さしいるゝわさぢふの宿

きたまどの風にやれたるふるすだれめもあはぬまで寒きよは哉

うなゐ子か垣ねにちかくつめばこそ草のめでたき春もしらるれ

柴の戸におちとまりたる樫の實のひとり物思ふとしのくれかな

などは、皆閑居の心をいひたるにて、いたく行ひすまして

ちりばかり心にかゝるくまもなしいつの夕やかぎりなるらむ

願はくは月のかげにもわれ死なむさらばやみにも迷はざらまし

といひて、心は何時しか空になりて、亡からむ日を待ちたるが、明治の御代、八年

といふ年、十二月といふ月の、三日といふ日、八十路あまる五つまで、

願はくは後の蓮の花の上にくもらぬ月を見るよしもかな

と遺して、むなしうなりける。誠に孝貞の路をふみて、遂に誠子の名に耻ぢず。德

も才も姿も、誠に清く美しく、蓮月の名にそむかぬ世をすぐしてけるこそあはれな

りしか、和歌は詞めでたく、劉暢にて、調も高く品ありて、かつは餘韻ある事は、むかしの清紫なども、及ばぬほどになむ思ひはべる。

春氷

谷川のはるの氷やうぐひすのみやこいそぎのかゞみなるらむ

川春月

とけわたる氷りにそひてはるの夜のつきもながるゝ井出の玉川

名所初秋

くれ竹のすゑ葉そよぎて伏見山みやこにちかくあきは來にけり

月

野に山にうかれ〳〵てかへるさをねやまでおくる秋の夜の月

花のころ旅にありて

やどかさぬ人のつらさを情にておぼろつき夜のはなにねしかな

越にかへる人を日枝の坂本まで送りて

かゝみ山見へゝ別れて行く旅のうしろかけだになはうつらなむ

寄衣戀

わが知らぬせこが衣のほころびはひきけむ人ぞぬふべかりける

此の外、秀歌あぐるに暇あらず。あはれ、此の才あり、此の歌あり、此の色あり、此の香あり、此の德ありながら、蓮月尼、人にむかひては、歌よまざるがごと、才なきがごと、色もなく香もなきがごと、言葉すくなになむありける。これを、なまやうの女學者に比べなば、如何なる感あらむ。嗚呼、おのれは、今更に云はず。

三宅尚齋の妻　　上野廣道

おのれ、この頃、書どもくりひろげつるに、あるものゝ中にて、尚齋が妻の事のいと目出度を得たれば、こを拔き出でゝ貴社にものしつ、

三宅尚齋の妻某氏は、淑德の聞ありし人とかや、尚齋或時罪を得て禁錮せらるゝこと三年に及びけるが、其の初、母と子二人を婦人に托して金二十片を與へて、母の奉養を懇にすべきことを言ひ置きける、後放されて家に歸りし時、相見て家族の皆無事なりしことを喜ぶ、其の時婦人は、彼の金子を出だして尚齋に返せしに、尚齋大

に怒りて此は何事ぞ　かくの如くならむ、母君は、必大に窮し給ひし事ならん、汝が不孝の罪言も愚なりと罵りしに、婦人徐かに對へけるは、母君の奉養は妾が心の及かぎり盡くし侍りぬ、唯妾が身は人に雇れて、爲さぬ事とてはなく、其の價を得て以て仕へ奉つりしなり、此の金子はかく禁を赦され給はん時の用に返し申さんと貯へ置きぬ、御身の囚となり給ひて、苦しうおはしまさんことを思ひて、いかで妾が身の安くあるべきことかはと思ひ、吾等三人は、冬の寒にも、綿の衣を身に着けず、夏の夜にも、蚊帳を室に垂れず、かゝれバ母君の御爲には乏きことはなかりきとぞ語りける、尙齋は之を聞きて大に感じ其の勞を謝したりとなん、

あはれ、此の事の如きは、誠に人の善き鏡にあらずや、家も富みて何の不足もなく、幸ありて憂き事だになき身にてさへ親に事へ夫に事るには、其の道に適はんこといと難き習ひなるに、況して貧きが上に禍さへあるに、能くも其の間にて三年までも、その患難を堪へ忍びたることは、誠に道に篤き行にあらずや、能く妻たるの務を盡くし、婦たるの道を致すとは此の如き人をこそいふべきになん、

看護法捷徑（三十七）

三笠舍主人

第五編　傳染病の心得方

（一）傳染病の總說

一　傳染病とは、空氣、水、其外の物の、媒介に依り、若くは、直に人より人に感染する、病の總稱にして、其傳染は、肉眼にて、視る事難き、至極微細の毒質、（病に依りて、性質、形狀、異なる處あり、皆一種の生體にして、之を「バクテリア」、又病芽と云）人の身體內に侵入するに依りて、興るものにして、其大氣中に浮泳するものは、呼吸に沿て、肺に入り、飲食物中に混ずるものは、共に胃腸に入り、終に血中にも達して、病を致すものなり。

二　此病毒は、總て動物、又は、植物の腐敗、其外諸般の不潔、濕潤、等に依りて、蕃殖するものにて、一人之に侵さるゝ時、手當不十分なる時は、忽ち一家、一村、終には一國、一地方、に蔓延して、所謂流行と爲り、無數の人命を戕して、實に言

ふべからざる慘狀を來すものなれバ、少しにても、傳染病たるの虞ある時は、速に醫の診を請ひ、次項各病の條下に揭ぐる處置を爲して、禍害を未前に防ぐ事肝要なり。

三 総て、傳染病毒は、藥液の爲めに、衰弱し、若くは死滅するものなれども、此外、猶日熱、及乾燥は、天然の殺毒物なれバ、空氣の流通、日光の射入を能くし、濕潤を避け、乾燥に就くは、傳染病を防ぐに、一大肝要の事とす。

四 傳染病の症狀は、各病に依りて、固より同じからずと雖、其普通の主症として、見るべきものは、最初身體倦怠、頭痛、食欲缺亡、等の前驅症ありて、次て俄に惡寒し、程なく、全身發熱を覺へ、(格呂布の如きは、惡寒を覺へず、其外稀れに熱なきもの有)特に、虎列羅の如きは、一も此等の前症なく、卒然に發す、或は汗を流し、口内乾きて、渇を覺へ、舌苔を生じ、惡心あり、脉疾速と爲る。(虎列羅の如きは、無力にして、殆擱るゝ事能はず)

熱性の病にては、脉搏の增多、體温の上昇は、必發の症にして、脉は大抵九十乃至百二十搏、或は猶其以上に上る事あり、體温は常度(攝氏三十七度前後)より、

一度半位上昇する時は、病者既に自ら熱を覺ゆべし。熱性病に在りては、四十度に昇るもの稀ならず、通例、四十一度に至るを極度とすれども、極めて稀には、四十二度以上に及ぶ事あり。但、脉搏は熱性病のみならず、劇しき體動、又は七情の感動、に依りても、增多するが故に、熱性の病なるや否やを、定めむには、必ず體温の上昇如何を撿し、脉搏の數と、交互參照するを要す。

其外、熱性病は、多くは、精神明朗ならず、多夢、譫語、を發するもの多し、此時、患者煩騷して、褥の外に脫し、甚しきは、病蓐を離れて、室外に奔出つる事有、此等の爲めに、病勢を增惡し、甚しきは、死を招くに至る事あるを以て、かかる精神上の障碍あるものは、一層看護の、注意を要す。

よき人も、あしき人も、わかてる色なかるべし　たゞし、
和するも、流すべからず。和せざれば、人にそむく、
流せざれば道なうしなはず。

漫録

あうむ文學（五）

楢の舎主人

歌人の述懐

源俊頼卿、和歌に堪能なりしかば、上下の尊崇最厚く、その位置は、當時の歌人、六條顕季藤原基俊兩卿の上にあり。顕季、基俊、何れも一家をなし、和歌の宗匠を以て許されたりといへども、卿の名聲甚籍たるにしかざりき。卿と顕季とは、交情いと〳〵濃にして、その間、さながら骨肉におけるがごとく、四時の慰問、和歌の贈答、常に絶ゆることなかりき、しかも、卿は、兄禮を以て遇せられたり。六條東洞院に、柿本人麿の影供を行ふや、當時の名輩ことごく集る。顕季いはく、初献は、和歌の宗匠つとめらるべしと。満坐唯諾、更に異議なきにより、卿を影前に進ましむ。その推許せられしこと、概この類なり。藤原實行かつて、長實と、貫之躬恒の優劣を爭ひ、久しきにわたれど決せず。長實これを、白河上皇に問ひ奉る。上皇のたまはく、朕いかにぞこれを知らん。宜しく俊頼に質すべしと。長實これを卿に告ぐ。卿いはく、躬恒をば輕視すべからず。長實いはく、然らば、貫之劣れるか。卿又いはく、躬恒をば輕視すべからずと、又他言なし。これ蓋、卿の深意のあるところ

にして、陽にこれを言はざるのみ。堀河院の時、花山の櫻盛なりと聞し召して、女房等を観せにつかはしたまふ、上達部殿上人ども、馬車をつらねて相從ふ。院、特に命じて俊頼卿にまかるべき旨傳へたまふ。時に、卿、病に罹れるを以て、得まゐらぬ由奏すと雖も、一向に許させたまはず、更に參内を促したまふ、即病を推して參内す。院覽そなはしたまひて、馬寮におほせて、卿のために馬を調へ、速に往くべしと强ひたまふ。宣旨の畏さ、又辭することわたはず。即花山に向ひ、「今日を待ちける山ざくらかな」といひかく。師時朝臣、「むれて來る大みや人やかざすとて」とつゞけたり。卿又、高陽院のために、詠歌の法を記す。世にこれを俊頼口傳といふ。

右の如く、一代の宗匠を以て許され、上下の待遇甚厚かりきといへども、常に身の榮達せざるを歎き、欝悒措くわたはず。懷を和歌によせて、纔に訴ふるところあり。その第宅は、京都三條及び一條にありて、その別莊は近江國栗太郡田上にあり。人生の不快を感じては、即、その地に遁れて、天眞の歌情を養はれたり。春の頃、都の消息に接しては、「花さかぬみやまかくれはかすめども數ならぬ身の春かとぞ見る」と恨ち、桑樹の露を視ては、「つゆにさへしをるゝくはの枝みればこきたてられし我身なりけり」となげき、鹿の聲を聞きて、子息俊重が、「やま里につまよぶ鹿のこゑきけどわれも都のかたぞこひしき」と羨めど、「われもしか都のかたのこひしきは聲ふりたてゝなかぬばかり

ぞ」と和し、稲田刈るを視ては、「うき身には山田のをしねおしこめて世をひたすらにうらみつるかな」とつゞけたり。然るに、その別荘も荒廢をきはめたりしにや。わし火たくまやのすみかは世中をわくかれいづるかどでなりけり」とうたひ、臥したるところに、雪の積みたるを見ては、「柴のいほのねやのあれまにもる雪はわがかりそめのうはぎなりけり」と觀じたり。

齋宮に具して、伊勢に下り、夥多の歳月を經たるに、身の老衰を思ひつゞけては、「すゞか山せきのこなたに年ふりてあやしくも身のなりまさるかな」と愁へ、別當賢行卿、齋宮の下らせたまひしをりは、行事辨なりしが、庶務を総へて京へ歸り、後十年にして、公卿勅使にて下られしを視るにつけては、我身の沈沒をいたまれ、曉の鴫の羽がき、夕くれの松風を聞くにつけても、如何に感慨を催したりけん。咲く花、散る紅葉をながむるにつけても、如何にあはれを感ぜられけん。僻遠に餘生をおくり、交はるところ、室山入道の輩に過ぎず。不快の情、遂に堪ふることあたはず。一篇の消息をものして、京なる顯季卿の許におくりぬ。

ひなのわかれに、よろづおとろへはてゝ、おばつかなきおほよその、つねにもせさせたまふちふねの、よるひるは、浪のこゝろにかけながら、月日の過ぎにけることも、なげきの森のときはあるうへに、薪をつめるうれへは、身にそへる影のごとくして、鈴鹿の關にもふりすてられ

ず、しふく山をもすべらかに越えにげれバ、さもあはれなりける身のありさまをもてあつかひて、しらぬさかひにもまどひけるかなど、袖のしがらみところせきまゝには、たゞはまおぎのをりふしてそには、なほよきさまのつらに、かすまへさせたまへかしと、人しれずあふがれて、思出もなき都なれど、さゝかにのはそかりけることなれバ、くすのうらはの風になびくも目にとまりて、さりとてやはいそぎたつを聞きて、野にたつしかの、まうさする人もなきにはあらねた、いでやいづこにも、つひのすみかならねた、釣するあまのとさだめかねて、やすらはるゝほどに、殘すくなき身のありさまは、旅の空、よはの烟ともたちのぼりなバ、あまのいさり火かとおほめかれんことも、おのづから、哀とぞかゝりやつたへきかせ給ふらんと、水ぐきのあとかきながされぬまゝには、これにもつきぬ心地するいぶせさも、たゞおしはからせたまふべし。

とへかしな玉串の葉にみかくれて
　もずの草ぐきめぢならずとも

顯季卿、即、返書をおくりて、卿をなぐさめられたり。その文に、

御つかいの、たゞいまくだれバとて、とく〳〵とせむるに、何事もおもひもあへぬほどにて、すなはち千はやふる神無月のついたちの日なん、いろ〳〵のことのはし見給へ侍りぬる。誠にみづかきの、いと久しくも聞えさせで侍りけ

るかな。花の都をふり捨てゝ、すゞか山越えさせたまひしに、さりともとしふく山のなをたのみをも、玉くしかとかひなくなのみして、過給ひにけりとうけたまはりて、くちをしくて、過侍りしかど、つひには伊勢の海の浪、立歸り給はざらめや。そのときこそは、はしあひのはまの眞砂の、かずをつくしておぼつかなかりしほどの事をも、きこえさせめ。いなかのはまのほどぞかりだにも、たいめんせてやはと、むら松のはまを頼みて、すき侍るほどに、あはせてもたれそのもりの、たれもいくりのゝ人を聞事も、ふちかたのかたくて、なに事も岩木のことのみにてなん。うきはしのおろかなるさまに、おもはれたてまつりぬるかな。

　　しらずやは伊勢の濱荻かぜふけむ
　　　折ふしごとにこひわたるとは

とあり。或日、近衛少將を免ぜられては、「三笠やまたちはなれにしあしたよりなみだの雨にぬれぬ日ぞなき」と悲しみ、或は、下﨟に越えられたるを歎ける頃、月明なる夜、周防内侍と物語し、事の便もあらば奏せよとて、「いとゞしく心つくしの秋しまの世をうらみても月を見るかな」と愁へ、神祇伯の缺けたるを、修理太夫顯季に、所望の旨を奏せよとては、「よきさまにことはれかしな日にそへてつめるなきゝのしたのうれへを」と依頼し、金葉集成りて奏するに當りては、殊更に、「なゝそぢにみちぬるしほのはま楸ひさしくも世にうもれぬるかな」の述懐を記して、白河院に哀斷し奉り

たるなど、常に、身の榮達せざるを歎かれたり。猥に名利を貪り、出身を求むるがごときは、歌人たる價値を損し、頗卑劣なるが如しと雖も、我國の習慣、また如何ともするあたはず。これを今日より責むるは、反りて無情漢たるを免かれず。吾人は、唯實力の如何を顧み、虚名の世を蔽はんを恐る。

然れども、卿の伊勢に下り、田上に往復し、筑紫に下りしなど、何れも、歌情を増し、歌人たる位置を自然に得られたるにて、當時の歌人が、京都の一小天地に跼蹐して、四時の感想をのべしに比ぶれど、その異、霄壤もたゞならず。これ即、卿の詠歌の、基俊顯季を淩駕する所以にして、題詠の歌と雖も、眞實に遠ざからざる大理由なり。田上の山莊にある頃、八月ばかり、徒然の餘、散策を試みんとて、俊重を從へて、さくら谷の方へ行くに、小憩すとて俊重が「春ならで櫻だにをば見にゆかじわきともわきぬみちのとほきに」、と打吟ずれど「さくらだにまことにはふころならでみちをわきとも思はざらまし」と和し、向の江に、兒童の遊び戯るゝを尋ねれば、みぞがひ拾ふなりと聞きては、「江のよどにみぞがひひろふうなゐでがたはぶれにだにとふ人ぞなき」とつゞけ、山際に大猪の遊ぶを、或人、小牛と見たりと語るを聞きては、「鹿をみてうまといひたる人にてもゐをばうしとや思はざりけん」、と戯れなど、親しく田舍の實狀を目擊せられたるが、自、歌とはなりしなりけり。うづらなくまのゝ入江、あすもこん野

路の玉川などの秀歌のごときは、何れも題詠なりと雖も、これを吟ずるものをして、眞野の入江の秋氣を想はしめ、野路の玉川の實景を浮ばしめ、感快殊に深きは、皆ともに、かつて卿の眼界に映ぜしところなるを以てなり。これを、彼の京地にくもりて、草子をくりかへし、諸方の歌枕を吟ぜし者に比すれば、その異、甚大なるものあり。俊頼朝臣は、生得の堪能とおぼえ侍り。基俊などは稽古の人にて、あやまりなかりし人なりきといへるは、誠に適切の評語なり。たゞ俊頼のひがことには先達よまぬこととなれど、われと始ておもふさまに、よみいだしてあざけりをなされしぞかりなり。といはれしは、卿の卿たる所以にして、他の歌人には、企て及ぶべからざる、特異の點ならざるべからず。萬葉、若は三代集の外の言詞は、好み詠むべからずなどの偏見を有し、後進を誤まりしものに比ぶれば、卿の達觀は、今日の識者をして、欽慕措くあたはざらしむるものあり。題詠の歌を乞ふ者あり、稍その難きを感ずるときは、家人子弟に、まづこれを作らしめ、その詞意の採るべきものを擇び、潤色して已が作となされしかど、俊逸甚多かりしなりといふものあれど、余は決して信をおかざるなり。苟、卿の卿たるを知られ、嗚呼また、誰れかこれを信ぜん。

卿薨じて後、建仁年中、俊頼影供をはじめ、卿のために追善回向を行ひ、且、歌道の冥護を祈る者あるに至る。影供、もと、人麿を祭るに起る。然らば則、卿また、非凡の歌人にあらずや。

あらずもがな（第五）

鹽井雨江

（七）學びの庭へ通ふ女子が、日毎、必ず殊更に衣服をかざり、髪をつくり、白粉を塗り、紅など化粧して通ふは、あらずもがななり。花月を見、狂言を見、はかなき遊びならむには、殊更に化粧して行かむもよからむ。されど、學びの庭といふものは、あだなる花月の名所にもあらず、はかなき狂言師の演戯にもあらず。此處に通ふは、もの見にゆくにはあらず、慰みを求むるにもあらず。唯、人たる道のくまをたづね、人たるの心の掟を學ぶにあり。

されば、なかなかに、あだなるうきたる遊びにはあらで、わが心を、誠の人のならしめむずる學問所なり。此處に聽きて、わが心を導き、此處に見て、わが心を正して、おのれが心を、優に美しく、おのれの行ひを、あはれに美しうせんずるが志す所にて、形を粧り、姿を飾るといふ事は、志さぬ所。よしや、ありとするも、さるものは、末の末のものなり。

さるに、衣服、調度、容姿の化粧にのみ、心を盡くして、通ふやうならむには、心の美、心の優は、必ずやおろそかにやならむ。かゝる女子は、いかなる心もて、學の庭へは通ふならむ。いかなる心もて教の道をきくならむ。おぼつかなく、あやしうおぼえて、あらずもがななり。

女子は、身のまはり美しう心がくる事は、いはでもの事なり。されど、身のまはり美しうするとい

ふは、殊更に玉をちりばめ、花をよそほひ、美服を飾るといふ事にはあらず。飾らずとも、身のまはり正しく清らにて、亂さぬやうしたらむが、美しうありといふなり。あだに飾りたりとて、美しうありとはえいはず。色もなく香もなき衣服まとひたるが中にも、おのづから、美しといふ事もあり。飾りといふものと、美しといふ事とは、またくおなじとはおぼえず。さるに、飾れば美しうあり、美しうするには、飾るなりと心得たらむは、大なるひが事なり。女子のつゝしむべきといふ身のまはりは、飾りといふ事のみにはあらぬを。あはれや、知らぬ女子。たわけや、そが父母。

(八)女子の裁ち縫ふ業知らぬは、斯くても、箸もて飯をくひ、人なみに、ものいふすべしりてかと、あやしうおぼへて、くちをしくなさけなく、あらずもがなの限り。妻となりて、夫の朝夕の衣を、ぬふ事はせず。母となりて、愛兒の寒暑の衣服をつくる業えしらず。さらむやうの者は、犬や、猫や、鳥や、けものや、さる動物の妻となり、母とはなるべし。此のたふとき人間の、妻といひ母となるものにはあらじ。犬や、猫や、鳥や、けものや、さるものは、衣ぬふ業知らずとも、妻ともなるべく、母ともなるべきになむ。

(九)女子の漢語つかひたる、豕のうなるよりをかしく、ましてや、歐州の言葉かたりたる、獅子のほえたるより、鷲のたけびたるより、虎のうそぶきたるより、物すごくすさまじく、魂は天にとび、身は地に沈まんばかり、恐ろしくおぼゆ。吠ゆる

もの丶吠えたる、嘯そぶくもの丶嘯そぶきたる、叫けぶもの丶叫けびたるは、さわるべきものなれば、驚きも、さばかりはあらじ。はゆべからざるもの丶吠えたるは、殊更にあやしうおそろしからむ。

(十)おのれ、この春、杉田の梅見に行きけるかへるさ、わかき婦人が、美しげなる小女と共に、輕げなる馬車に乗り、自ら手綱とりて、馬をやるをあひたり。意氣揚々、左右を叱するさま、すさまじければ、あなやと、遙よ飛びのきて、側なる老翁にとへば、某とかいふ家の婦人が、運動せらるるなりといふ。あな、あらずもがなと見おくれど、のれる美人も、馬となりて、飛ぶがごと見えたり。

道のしをり歌合(十一)

久志本常幸寄贈

こゝろとや紅葉はすらんたつた山
　松はしぐれにぬれぬものかは

身のうきにをれふしぬれば萎蘆の
　よをばなにはの何とうらみん

たつたの紅葉は、みづからはしたなき事をつゝしみて、我心のつたなきを恥べき旨になん。なにはの声は、身のうきふしに世をうらみ、人をかこたず、たゞ運命をあきらむべきよしなり。「かずならぬ身はいふかひもなきまゝにおもひの外の世をぞうらむる」は、あぢきなし。

あまのかる藻にすむ虫の我からと
　音をこそなかめ世をば恨みじ

うつろふも心づからのはなならむ
　さそふあらしをいかゞ恨みん

わが身をかへりみずして、たゞに人をあだなりとかこつは、いとわりなくはしたなし。

いつはりと思はで人もちぎりけん
　かはる習ひの世こそつらけれ

つらけれど恨みんとはた思はえず
　なほ行さきをたのむこゝろに

人にすさめられて、怨て怒らず、いとおとなしく殊勝なり。つまとなり、夫となるは、淺からぬことなるに、をうなごゝろのはしたなく、一旦のゑんぼうみたへずして、後の悔をかへり見ざるおろかさよ「つらしとて我さへ人をわすれずはさりとも中のたえやはつべき」とよめりしは、有かだし、「うきふしもたゞそのまゝに見すぐさばかく名殘なくなりははてまじ」といふぞときたぐひ、いたづらに勝をかむとも、いかにせまし。

つらさをもうきをも忍ぶ思ひこそ
　こゝろの道のまことなりけれ

限りなく思ふこゝろのふかければ
　つらさも知らぬ者よぞ有ける

實義の心ざし、かくまでに厚く至れるは、まことに人の人といふべし。此歌をもて、おやをふとまうとめにつかふまつる道のまもりとせば、何事かこのぶにたへざらめやは。

そこひなき淵やはさわぐ山がはの
　淺き瀬にこそあだなみはたて

打よする磯邊のいはゝつれなくて
　おのれ砕くるおきつしらなみ

ものあんじするをうなの、おのれと心を苦しめて、はしたなくなきはらだち、えもいはぬすさまじきさまして、うたゝ夫にすさめらるゝ、いとも〳〵、あさましきわざなり。

あぢきなやいぶきの山のさしも草
　おのが思ひに身をこがしつゝ

うらみじななにはのみつにたつ煙
　こゝろからやく蜑のもしほ火

いとあさましきこゝろざま、なべて女のさがぞかし。

すませども淺き瀬にたつうは波の
　しづめ難きはこゝろなりけり

音になはたてぬも苦しおもひせく
　こゝろのうちに瀧なくもがな

をみなの心といふものは、おほむねこのさまをまぬかれず、恥らひつゝしむべし。

さらぬとて疎くはいかゞなら柴の
　なれ行にうきふしは見ゆとも

うつろはでしばし篠田の森を見よ
　かへりもぞするくずのうら風

世をわたる道は、何事もしんばうをむねとして、つとめて短慮をつゝしみ、のどやかにおとなしくあるべし。心みぢかく、卒爾に事をいらちては、悔てかへらぬ悔あるべし。

ひさかたの空とぶ雲のいかにして
　照る日の影をたちへだつらん

中々にくもると見えてはるゝ夜の
　つきのひかりのろふ心地する

佞人の君徳をくらます、世に歎くべきことのかぎりなり。人たれか過なからん、よくあらためおこなへど、かへりて一きはの徳輝を仰ぎて、いとたふとし。人に君たるもの、こゝに心を用ゐざれば、明君も暗主となり給ふぞかなしき。

庭のおもはまだ乾かぬに夕だちの
　そらさりげなくすめる月かな

くれたけの緑はいつもかはらねば
　時雨ふりにしまがきともなし

やむことを得ずして人を怒るとも、いかりをうつさず、舊惡を念はず、ゆふだちの過さりし跡のごとく、餘波なく、たいらかにさはやかなるべし。また、臣子たるもの、君父のいかりにあふては、ひたすらにおそれみつゝしみて、たとひおもひの外なるぬれ衣をきるとも、露ばかりもうらみがはせず、のちのうたのさまのごとくになんあるべかりける。

しぐれつる外山の松のいろよりも
　ふらぬ雪げのくもぞつれなき

あわ雪のつもらで晴しそらよりも
　降るとしもなきはるの雨かな

ふりはてもせずして、こちたくそらのくもりあひたる、女のすなはならずしてしうねきさま、いと〳〵見にくし。

いかにせんひとの心のふたおもて
　このてがしはのこの頃の世を

何事をおもひけるともえられじな
　　ゑみの中にもかたなやはなき
うへはなごやかなる人の、内かだましく、さかしらなるこそ、世におそろしきもの丶かぎりならめ。
あまの原ふみとゞろかしなる神も
　　思ふなかをばさくるものかは
求めつ丶毛をふく人をいかゞ見ん
　　まげしきこ丶ろ虎はありとも
よくかげごとをいひて、人の中をへだて、平地に波を起して、人のわざはひをたのしむ者あり、いかなるおぞましき悪心にや、さまでもなき事をおうやうに見すぐしはせで、意地わろくきめごまかに沙汰して、とかく人の害をなすもあり、いかなれど、かくかだましく、おとなしからぬ心をもてるにや。
世の中のとらおはかみは何ならず
　　人のくちころなままさりけれ
歎かじよよしやいかにも磐余野の
　　あさぢかるかや露みだるとも
佞人讒言のにくむべき、いかにともすべからず。たゞみづからつ丶しみて運に安んずべきのみ。
わたつ海の深きこ丶ろはあり乍ら
　　恨みられぬるものにぞありけり
ぬれ衣をいかゞきざらん世の人の
　　天が下にしすまんかぎりは
いにしへの聖賢だには不慮のわざはひをかうふり給へど、世のならひをあきらめて、たゞ我

心に恥ることのあからんやうに道をまもりとぐるこそ、人の本意にはあなれ。

紅葉川ひとをくだせむいなぶねの
　かへりて沈むものとこそきけ

あしかれと人をいはじ難波がた
　我身のうへにかへるしらなみ

己に出るものはおのれにかへるならはし、諺にも人をのろはゞ穴ふたつといはずや。「何事もおのれに出る山びこのこたふる聲や人の世の中」、むくひをおそれつゝしまざらんやは。

こゝろには難波のうらみ思ふとも
　云はざるぞよき人のよしあし

よしのかはみづの心ははやくとも
　瀧津音にはたてじとぞおもふ

此たしなみなからん人は、ものはしたなくかしかまし、わきて女は、はらたゝしき事ありとも、いさゝかも聲高にのゝしるべからず。下ざまのものをしかりいましむるも、しとやかに喩し聞せてこそ、そのことわりに感服はするものなれ。

明石がたいろなき人のそでを見よ
　すゞろに月はやどるものかは

白浪もよせくるかたにかへるなり
　ひとを難波のあしとおもふな

とかく己を修むるこそ、道の本なるべけれ。

言の葉の道まもるらじかはぐちの
　關のあしがきあしき名もうし

こはた川こは誰がいひし言の葉ぞ

なき名すゝがむ瀧つせもなし

病は口よりいり、禍は口よりいづるとあん。すべて人ごといひわる、ざれぐち、人のあどなうち、とはずがたりのたぐひ、はしたなきわざなり。わきて、女は、くちさがなく、人のあひだにものいひ起ることおはかり、あるは、かりそめに大事をもらして、家のわざはひを引おこしぬるためしすくなからず、まことにおもくつゝしむべし、

春の野にあさるきゞすのつま戀に
　おのがありかを人にしれつゝ

それときく聲にいのちを捨てけり
　果なきふえによるのをじかは

きゞすの歌は言をつゝしむのしめし、蛙は口から呑るゝといふ諺のこゝろになん。笛によるをじかは物にはださるゝのたとへ、慾におばるゝのいましめ、殊につゝしむべし。

穂には出じ蘆のふし葉の下みだれ
　いりゑの浪にくちははつとも

深き夜のまどうつ雨におとせぬは
　うき世を軒のしのぶなりけり

人にむかふて恩をてらひ、功にほこりがはするは、心にまことなきゆゑぞかし。たとひ人わが恩をしらず、上に我功をしろしめされずとも、さがなくうらみかこつべからず。

火の説

横井知萬多

空にそびえし高殿も、たゞ時のまにやけうせて、こ玄關はこゝなりしが、門はそこにやありけむ、このあたりは、金子おきつる處よ、こゝには簞笥長持なとならべおきつる處よ、かしこは米藏、あなたは物置にてありけりなど、烟のまだそこゝにもえのこる間に、なげきさまよひ、貴きも賤しきも、すまゐは更なり、をし物、衣物、一つだにのこりしものなく、又、猫のやけでけたる、犬のつながれたるがくさりのまゝにかたちとゝめたるなど、目もあてられず。かゝる中なれど、人の傷おひたるもの數しれず。ましてなにがしの媼はやみて打ふしたるか、事のまぎれに誰もえ救はざりき、くれがしの稚子は、立ちまどひて、けぶりの中に走り入りたるまゝ、行方しれずなど、いづれか涙の種ならざらむ。あはれ火のすさびはおそろしき物やはある。甍連ねし市街も、一日の中に燒野原となり、一時のまに孤となり、獨りものとなるものさへありと思へば、悲しともいと悲し。しかはあれど、又思へど、燈火火桶など貯からぬにしもあらず。汽船汽車心ゆかぬにしもあらず。さはあれ、螢雪をもあつめ月をたよりにて闇はたどられつべし。衣物さはに着なむには、寒さもしのかれつべし。船も車もやゝおそきをたにたへ忍ばむには、其のたよりなしともいふべからず。さむかりの事ならましかば、家藏をやき、人の命を失ふ火こそは、遠くこの世の外にも打やらふべけれど、誰も〳〵命をたもつべきをし物は、すべてこの火の力によ

らぬはなし。さてこそ片時だにえはなちおくべからざるなれ。おしなべて、利の多からむものは、又害もすくなからず。たゞ其の用ゐざまによりて、ともかくもなるもの也。かゝればこそしば〳〵悲しきめ見ても、なほ世の中にかばかり尊きものはなしと、えうとみあへぬならめ。人も又かゝるものにて、なくてもと思はむほどのものならば、さまであしきこともえせぬなるべし。此人なからずばと思ふばかりの人は、又いかならむ事しいでむもしるべからず。あはれかれにつけ、これにつけて考ふるに、何事もたゞそを用ゐる人の如何にこそ。

山崎家盛が妻の事

新井君美

或人の語りしは、家盛が妻は、池田紀伊入道勝入が娘にして、參議輝政の妹なり、此の妻極めてみめわろく、手足さへふつゝかに、力ふつうの人にははるかに超えたりけり、されど、年頃夫婦の間もむつまじからず、されどうらむる氣色もなし、大坂の奉行等が軍起しゝ時、輝政は、東國の御供にて、北の方は大坂にまします、此の北の方と申すは、德川殿の御娘にて、家盛が妻の爲には、兄嫁にて渡らせ賜ふ、家盛大坂にとゞめられて、中の渡りの新關を守りしかど、もとより東國に心を通しけれど、とかくはかりて輝政の北の方をぬすみ出し、おのが妻と其の腹にまうけし子をば、後

には甲斐守おのが三田の城に落す、是は奉行等より、輝政の北の方と甲斐守とをとり參らせて、質にせんずるとは、親戚のよしみにつけてなげき、かなはぬさはゝ、自分腹切らんと思ひ定めしが故なり、かゝる所に、細川が人質をとり損じて後は、「東國に下りし人々の質請ふに及ぜず、大坂に有合ふ人々の質參らせよ」、と有りしかバ、家盛が妻を參らせんとす、妻は夫に近づき無手と取へ、護刀を引ぬき、心もとにさしあてゝ、古より、女の夫の身に替りけるためし、珍しからず、いかに年頃情無くましますとも、夫となし妻とならんからに、御身にかはりぬべき人なからんには、仰に任せぬべし、これは是それに侍らず、先わらはが兄嫁にて候ふ人は、内府の姫君なれむとて、自の命捨てゝぬすみ出し參らせ、又いとをしと思ふ人にをさなき人つけて、これも同じく落し、命にかへん料にわらはをとゞめ置きて、人々の手に渡れと承るは、あまりに恨めしき計にも侍るかな、わらはつれなき人の爲に命失はんとも思はず、猶もわらはに參れとや思ひ賜ふや、さらむわらはも思ふ所有り、いかにや／＼」といはれて、家盛大に恐れて、「のたまふ所、理りにこそ侍れ、我が過をむゆるし賜へ、此の上はいかで參らせ侍るべき」といふ、「さらバあやまらせ賜ふとの言葉の、末詐らぬよし誓ひ賜ひなんや」、と神佛にかけて誓はせ「年頭恨參らせぬにはあらねど、色にても見せ參らせざりき、今はかくあらはれていひ出なん、後再まみゐ參らせんとも思はず」とて、供する

女、二三人召具して、借馬かりて打乘り、三河國さして、兄輝政の城に下り、やがて尼になりて天久院といふ、其の後、此の人の住みける所に、夜更けてぬす人四五十人が程打入りたるに、天久院大薙刀引提げて走り向ひ、手もとに進むもの三人なぎたふし、殘る奴原散々に手負せて追拂ふ、さる人の娘なれど、心も剛に、理にも長じたる人なりといふ、まことなるにや。（藩翰譜）

松山天姥の傳

山崎美盛

松山天姥、名は敬利、字は伯義、天姥は別號なり、生れて幼秀髫眉、嘗て安志侯に仕へたり、侯弱かりし時より學士に禮遇厚く、頗る儒雅を尙び、其の書法も亦遒勁にして當時に傑出せり、かゝれば藤公謹、關子肅などを友とし遊び給へり、さればかねて天姥の書才有るを愛し給ひて、或る時天姥にのたまふやう、「子は書法を誨ふべし、自ら勸め學べよ」と有りければ、これより天姥孜々として業に進み、世にも漸知らるゝ程なりしが、壯年にて父を喪ひて、母の養に生育せり、母或る日傍より天姥が怠りがちなるを見て、一の古簏を提け來りて之を傾くるに、反古堆を成せり、皆是天姥幼より習ひ書ける所の字紙なり、其の紙邊に、盡く年月を記し置けり、さて指を屈めてその時をかぞへ、「此は汝幾歲の時かける者」、卽かくの如く幾歲なるはまか〱なり、かゝれど吾恒に悅びて、他日彼の公謹子肅が輩に後るゝ事はせじと思ひたり

しが、今にして始の勉強に比すれば、大に進まざるに似たり、吾駑馬の鞭うたれて後に漸に歩を進むるが如きを願はんや、汝何ぞ勉めざるや」とて、彼の字紙を抱きてさめ〴〵と泣きける程に、天姥もこれより彌〻益〻力めて怠らず、寝食を忘る〻に至り、心目を古法帖にきはめしかば、終には書を求むる者多かりしとぞ、斯くて勤仕に暇無しと雖、猶かつ豫怠有ることと無し、その業とする所は、則古人にも恥ぢずと云ふべし、」されば世に知らざる者なし、されども天姥嘗て言ふ、「我固より小國の末臣にして、大方君子に鄙付せられずして、詩書の席に列れるは、實に我が侯と老母との敎誨の厚きによれり」と云へり、かく其の人となり謙遜辭讓にして、人を侮らず、偶〻人の一善行有るを聞けば、朝夕之を稱して止まず、此の一事を以ても、其の常をおもひやるべし、」天明癸卯十一月、年五十八歳にして沒す、駒込願行寺に葬る、

美成云、古來賢達の人、或は其の母の賢によれり、孟母はいふも更なり、晋の陶侃、宋の伊川、皆其の人なり、父は嚴にして、親ありと雖、母の慈愛に及ばじ、これ母の賢なるは、其の養育の際、必ず敎誨無きこと能はず、習性と成ると謂ふ可し、近來皆洪川園、母の病床に看護侍養せし時、其の母云、「吾が病は憂ふるに足らず、唯恐らくは、汝が業に妨ならん、汝勤學せよ、我を以て念とすることと勿れ」と云へり、と鼎表の文に見えたり、書畫は小道と雖、其の母の敎へ

励まし、故に、天姥の書名、世に遍く聞ゆるに至れりと云ふべし、（名家略傳）

忠孝二筋道

渡部乙羽

其四

月は同じき月ながら、親子土地を異にして、袖の涙にその影を宿す果果なさは、萬石とりの大名にまたあるべき事かは。別けて浮田中納言秀家は、大閤秀吉公在世の頃の羽振好き名將とて、威光よ肩を並ぶる者無く、飛ぶ鳥も落なむかりの權家なりしも、時世の傾く處は、片廂の隙間洩る礒邊の住居、荒き風に世を淋しく暮して、朝夕に音信るゝものは、濱の松風、友呼ぶ千鳥のみ。曩昔は千騎萬卒の頭となりて、陣頭に金扇を揮ひし身も、流謫人の今は十人あまりの家來と、頑是無き我が子の、罪も無氣に笑ひ戯れて、憂きが中の樂み草となるの外は、絶えて目を嬉むしむるものなし。

今宵の月は影朧にして、岸邊の波の白う見ゆる夕景色、海平かに熨すが如くなれど、

磯馴松にも風絶えて、汀に群れ飛ぶ千鳥の聲も無く、沖には一團の影を映して、嵐のこれを邪广する無けれど、その色の清さ、瑠璃とはこれをや云ふらむ。浮田の若君が傅役靜江は、この麗はしき景色にや浮れ出でけむ、波打際の松が根に腰うちかけて、彼方の空を眺め居けるが、何に感じてか、涙をはら〳〵と落して。あア妾ほど味氣無き身は、またと世にはあるまじ、頼む夫には別れ、愛しき子には離れ、その上慈悲深き御臺樣のお傍に侍き參らする事もならず、斯かる嶋根に流されて、朝な夕なに泣き給ふ若君を、愛しつ賺しつして、御養育申上ぐる胸の苦しさ。彼地に殘し來りし我が子は、如何に成長なりしやら、御臺樣とお別れ申し丶折、くれ〳〵も行末を頼みまゐらし丶かど、若流行風邪になど冒されて、病うては居らぬか、三年經ても三つの道理、今頃はアンヨも出來、母樣などに口も利くべき時なるに、その笑顔だに見ることもならで、風に曝され、雨に褪め、髮も結はねた、肩に垂れ、衣も更へねば海藻とも見ねむ、それよ指屈れば昨日で恰度千日あまり、住吉の浦を船出の日より、神に祈り、佛に願かけしても、今に赦免の御沙汰も無く、殿樣は年一年にお窶れ遊ばし、若君もこの頃は勝れ給はぬ日のみ多い、若御兩所の何方にて





も、御病氣になどなり給はゞ、醫者も無く、藥さへ無きこの小島、何して御介抱申さうぞ、あア氣にかゝる事ぢや、ドリヤ家に行て、若君とこの月を見ませうと、臥猪の小屋に辿り行き、若君を誘ひ來りて、乾ける砂に腰うち下し。あれ〳〵御覽遊ばしませ、月影の明るい彼方の岸に、御家來衆が寄つて集つて、魚を捕つて居りまする、明日の膳部は乳母が作つて、美味いものを進せましよ、若樣アノ千鳥の飛びまする景色が、興ある事では御座りませぬか、おうこの二三日の忙しさにお髪も梳いて上げぬ中、もうこのやうに延びました、明日は凉しう取上げて進せましよと、肩頭を撫で下しつゝ慰むれば、若君は笑み傾けて。いゝえ、まだ何とも無い程に、四五日は斯うやつて措いてや、それよりも父上の御鬢を仕末してはたもらぬか、お顔が怖う見ゆるぞへ、のう乳母や、彼方に小嶋のある向は、母上樣のおゐで遊ばすお國かや、私は一目逢ひたいと、はろ〳〵落る涙を抑へ、啜り泣きして居給ふを、靜江は見るに耐へかねて。お道理で御座りまする、燒野の雉子夜の鶴さへ、親子の情はあるものを、勿體ない大名の若君が、鳥獸にも劣つたる憂目苦勞を見給ふは、何の世にせし罪ならむ、三惡道は辛しといへど、親子の緣の薄き程、娑婆に悲しきも

のはなし、強がり給ふ若君より、縋らるゝ身の切なさは、地獄の責苦、焦熱の苦患に増して一入なり。これ若様泣き給うても詮無いこと、それよりは父上様にお孝行を遊ばして、天道様のお救ひをお待ち、二年三年經つ中には頓て赦免の御沙汰もありて、親子目出度御對面遊ばす折も御座りませう、さア、泣いては武士の力が落る、家へ歸つて父上様に、また勇ましい合戰のお話を聞きましよと、手をとれば若君は大人しく、涙を袖に拭ひ給うて。そんなら乳母、早う家へ行て父上の御機嫌を問うて呉れ、あれ家來共が魚を捕つて歸り居る、急いで行かうと駈け行けば、見るもいぶせき藁葺屋根、疎の壁の隙間より火影のさして物音聞えぬ。あれ／＼父上はまた兵書を讀んで居給ふぞ。乳母早う行かぬかと、砂路を辿る足音に、秀家も亦聞耳立てゝ竹椽に立出で、丸木の柱に縋りつゝ伸び上り、我子の方をうち眺めて。若や、急いて轉ぶなよ、其處には蠣の殼もある、藻草を踏んで、辷らぬやうに用心しやと、窮する程なほ子に愛増り、伸び上り打眺めては、月下を辿る二人を見詰めぬ、漸う家に着きけれど、若君は父の側近く走り寄り。父上、また軍學の講釋して給はらぬか、鎌倉殿は蛭が小島から旗上げ遊ばし、九郎判官は鞍馬の山で、天狗と試合をなされ

しとか、私も乳母に劍術習うて、德川殿と戰爭をいたしまする、サア勇ましい話をしてと、膝を進めて詰め寄りぬ。

文林

山新樹　　近衛　忠熈

夏されは若葉しげりてをちかたの
峯さへ近かく見ねわたるかな　　毛利　元德

嵐やまなべてわをバになりにけり
花にはまつのたへまありしを　　東久世通禧

みなれたる軒ばの山もみなねさし
高きをろふるこゝちこそすれ

早蕨　　佐々木高行

早蕨をとりにのぼりしきこりみち
若葉しげりてみえずなりぬる　　鍋島　直大

松バかりみえし外山ものこりなく
ひとつみどりに茂りあひにけり

新樹風　　黒田　淸綱

青雲のなびくと見しはなつやまの
こずえを風のわたるなりけり

山新樹　　高崎正風

み山ぎの同じみどりになりぬれど
　猶まがはぬはさくらなりけり

前田利鬯

うすくこく色はわかれし夏やまの
　木々のみどりのおもしろき哉

首夏風　　諏訪忠元

茂りあふ若葉そよぎてかけそめし
　軒端のすゞにかせわたるなり

山新樹　　宮地嚴夫

若かへでさくらのみどりうち交り
　夏こそやまはゆかしかりけれ

坂正臣

山はみな青葉になりぬくもとみし
　花のこずゑやいづれなるらん

小出粲

卯の花のまがきの上になつやまの
　みどりさやかにみえわたる哉

植松有經

花はちりかすみははれて山といふ
　山みなあをくなりにけるかな

谷勤

まどゐなる山のこずゑも若葉さし
　みえすかぬまで成にけるかな

内藤存守

山はみな若葉しげりて木のまより
　見渡すかたもなくなりにけり

落花　　三輪義方

人ごゝろうすくなりゆく末の世は
咲くかひなしと花やちるらん

首夏　西川須賀雄

來て見れど花の色香もなかりけり
みどり冷しきこころも手のもり

蛙　糸山貞幹

さくら花ちりかふ小田の苗しろに
聲もにほひてかへるなくなり

松下泉　師岡正胤

とこしへに淸水はきよく流れけり
かけすくつれぬ山のまつかげ

鈴木のぶ子　佐々豐水

都路のつきのながめをしのびけん
聲うるはしきやまほとゝぎす

水邊藤　草野隆道

ふぢのはないざ見にゆかん大井川
なかれてもゆく春のかたみに

禮　上杉義順

世の中はあやめ正しきからにしき
おりなしてこそ見べかりけれ

引田部赤猪子　佐藤恭順

少女子がかくろき髮のかはるまで
松のみさほぞ世にたぐひなき

山新樹　鍋島榮子

なごりなくかすみは晴れて夏山の
わか葉凉しきあさはらけかな

白雲のあはたのやまのわかみどり

柳原愛子

涼しくみねてなつはきにけり
小池　道子

梢みなみどりになりてわしびきの
山わたらしくみゆるころかな
松平　健子

常磐木のおち葉ふゆめくおく山に
夏をみするはわか葉なりけり
鳥尾　廣子

おしなべてわか葉しけりぬ吉野山
いづれさくらのこずゑなる覧
諏訪　晴子

庭新樹

吹風をいとひしにはのわかさくら
青葉をぐらくいつなりにけん
安東　菊子

泊郭公

船とめて追手まつまにうれしくも
磯やまちかくなくほとゝぎす
小川　昌子

夕時鳥

夕月のほのめきそめしさみだれの
雲間すぎ行くほとゝぎすかな
師岡須賀子

待時鳥

ほとゝぎす今夜こそはとまつ宵も
はかなくあけて鶏の音ぞする
河野　文子

夕卯花

卯の花のかをるまがきの夕ばえは
外にしられぬつきのかげかも

よのなか

森　馬太

何にたとへむ　あさひらき

過ぎいにし古の　あとなきと
たのしかるべき　よのうみを
おもひすてゝも　わたりけむ
常なきものと　いまぞ知る
奈良のみやこも　しをれぬと
さかえ行くべき　世のなかを
木の葉とのみや　散りにけむ
わが身にそへる　影なれや
おもひすつれど　はなれぬと
此のおもしろき　よのなかを
うらみてこそは　過ごしけめ
このおもしろき　よのなかを
われからすつる　事やある
嬉しさあまる　袖ふりて
うたはむ舞はむ　いざまはむ
何事もみなおもしろき世なりけり
いざやうたはむいざやうたはむ

古戰場をよめる歌

海上壽子

刈鵆のみだれにみだれ　亂れたる世をし思へど
劍太刀身もたなしらず　君が爲おやにはわかれ
國の爲子にもたはなれ　戰ひし益荒たけをが
玉きはる命死にけん　屍こそくさもむしたれ
其の草の青野がはらぞ　鍬とりてたがへす賤よ
こゝろしてすけ

常盤雪行　横井知萬多

遠寺の鐘のきこゆるは、はや夕ぐれなめり。何となく薄くらくなりゆくに、竹などの雪をる丶音にも驚きつ丶、たどりくる母子あり。ふる雪に堪へかねて、さきにたてる二人の子は、なきいだすを、母は、こ丶ろかなしとは思ひたれど、そを色にも出ださず、やう／＼にいへるやう、やよ、汝等も、今はいとけなき年にもあらず、すこしは、物をわきまへても見よ。今、我身等は、我身等ともいはれぬ世の中、いかに寒さに堪へねばとて、弓取の家に生れ、ゆく／＼は、旗をもあぐべき身にてありながら、かばかりの事になくとは何事ぞ。母はしかめ丶しくはうまざりしものをと、いさむるも、いと忍びやかなり。こなたのはらからは、かたみに打まもりたるのみにて、とかくのいらへもなく、涕はなほと丶まらねど、はげしきことばに、す丶りあげながら、打笑めど、母はいとうれしげに、あはれ、かくてこそ、左馬頭殿が子ともいふべけれ。このさまを、草葉のかげより見そなはして、いかによろこび給ふらむなど、いひながら、聲の漸くもりゆくは、泣くにもまされる悲しさをつつめるならむ。袂かざして、二人に打おほひ、やぶれたる笠の下に、ひきいれたるま丶、み雪の中に仆れふしぬ。ふきくる風は、身をきるやうなるに、こぼる丶涕も、こほりぬべし。されど、この母が物思にくらぶれば、物の數にもあらざらむ。

雪はいよ／＼ふりしきり、風はいよ／＼さむし、しばらくして、やう／＼に面をあげ、かくては、

遂にこゝに凍え死ぬべし。夫にさへすてられたる身は、つゆ惜しむにあらねど、このいとしき子等のともに倒れむには、源氏の家のおこらむをりもあらじ。源氏の家のおこらざらむには、なき夫よ對し、細々にまみえまつりて、何とかきこえあぐべき。あはれ、とても、かくても死ぬる命ならば、かの雪にふしたる、くれ竹の、よし折れむには折れ、せめては百に一の幸をたのみとして、こゝばかりだにのがれ得させむ、道をもとめ、末の榮えをまつぞ子等は更なり、なき夫の爲め家のためにもすぐれてよき事ならまじと、をゝしくもおもひはかりて、敵の門さまにむかひぬ。折しも、何の夢にかおどろきけむ、懐なる兒が聲たてゝ、泣出しけれど、さるにてもかゝる兒を手放なしやらむことの、いかにしてもと、みだるゝ淚を、あやしまれじと、笠おもげに、打かたむけ、千々にくだくる物思ひに、いよゝ闇にぞまとひ入りけむ。時にねぐらうしなふ烏の聲、いとあはれに聞ゆ。

をさなき子どもをさとす詞

勝家貞良

吾子等よ、若子等よ。あこ達は、今日より、何ちふ組とはなりしぞ。尋常科二學年となりしよ。さなり、さなり。吾子等は、既に、一學年を習ひ卒へて、今は、めでたく、二學年に昇りぬ。こはこれ、また／＼、吾子等が、いと長き一とせの月日、常に怠らで、いそしみ勵みたる其結果なり。吾子等よ、思ひかへせ、其長き一年の間には、照りは

たゝきて堪へがたき夏の暑き日もありしならむ。吹く風は、身をきるばかりさえ〳〵て、雪さへふりしきりたる冬の寒き日もありしならむ。吾子等は、其雪のふりしきりたる寒き日も、其照りはたらきたる暑き日も、よく堪へ忍びて、日々休むことなく、學校へ通ひたりしは、なか〳〵に容易き事にはあらざりしならむ。其寒き日を、其暑き日を、聊も厭ふけしきなくいそしみて、師の君達の敎訓を、よく守りたればこそ、今、かう、二學年とはなりしならめ。いで、こと改めて問はむ。吾子等が、日毎に、學校へ通へるは、そも、何の爲ぞ、種々のことを覺えて、賢き人とならむ爲よ。まことによろし。吾子等、もし、この一年の間、いそしみ勵まで、日に怠りなまけたれば、いかなりしぞ。今日のごと、此組に昇ることを得ざりしならむ。唯に、此組に昇るを得ざりしのみならず、また、種々の面白きことをも覺えで、賢き人ともなること能はざるべし。思へよ思へ。吾子等を、かう、學校へ通はしめたるは誰ぞ。吾子等が父母なり。吾子等が父母は、吾子等をして、賢きものとならしめむとの心よりなり。されば、吾子等が父母は、今、吾子等の、めでたく、二學年に昇りしを見て、いかばかり喜ばせ給ふならむ。吾子等も、また、父母の喜ばせ給ふを見て、いかばかり嬉しからむ。この喜びを考へ、この嬉しさを思へば、吾子等は、今より、いかなることをか心にかけて、いかなることをなさむとかする。今一しほはげみに勵みて、いよ〳〵にいそしみ勤

め、師の君達の教訓を、尚、よく守り、この學年をも、めでたく學び脩めて、また〳〵、父母の御心を喜ばせ給はむやう心がけずてやは。ゆめ〳〵忘るな、吾子等よ、若子等よ。

時鳥を待つ詞

尾崎すう子

春待ちつけてより、待つとまたるゝ物のおほかる中に、人やりならぬもの思ひつゝ、目も空にのみ見やられて、村雨そゝぐ夕、柴の戸たゝく雨のあしたも、一聲をだにきかましかばと、老のみの消えがてなる露の命にもかへばやなど、物ゆかしかり、聞かまほしがるも、年々、おのが心づからの物思ひなりけり。さらでだに、いぎたなき夏の夜すがらおきあかし、もの思ひくらせるも、みな、人ごとに、われこそは、初音聞かめの心ずさびになん有りける。げに、ところせばき庭のせざい、おしなみたる露の、かごと斗りも、などや來なかぬならん。向ひの岡に、としふりたる、御社のち木のかたそぎ、かたことをもらしてだにも我に聞かせよ」山ほとゝぎす、かうもうらなうまちわたらるゝものか。もにすむ虫のと、いとあやしきまでに。

まよひの夢

竹園女史

妾、幸なうして、年ころ、貧しくなむ、世をへにける。されど、たるをしるてふことしらぬにはあらねど、萬の事、心にまかせぬをりにふれては、

いかで、黄金あまたあらんには、さてぞ心安からめ。寳多くもたらむにはさこそたのしからめなど思ふ心、はた、なきにもあらざりけり。ある夜の夢に、いづくともわかず、いときよらなる高樓に、笛ふく風流士あれど、琴ひく手弱女あり、水清き池の邊におり立ちて、釣たるゝ翁あれば、こ高き岡にのぼりて、花をる小童あり、あはれ、世には、かく、思ふことなげに遊びたはるゝ人も有りけりと、いとうらやましく思ひて、我にもあらず、しばし彳みをれば、さとおとして吹來る風に、ありし家も、人も、後なくなりぬ。おどろきのあまり、思はずさけぶ聲の、耳にいりて、現にかへりぬ。心をしづめて、あたりを見るに、枕邊なるふりたる屛風の畫に、五輪の塔のもとに、骸骨三ッ四ッかきたるが、人ども、家ども見えたるなりけり。つら〳〵思へど、夢のみにもあらず、世に時めく貴人といへども、終には、骸骨ならざるはなし。しかならむ日には、我ごとき寳も、黄金もなきものこそ、中々に、心安けれど、うき世中を思ひさとりて、おき出づる、やがて、筆とりて、ありし夢のさまを書きつらね置きて、年ごろ、師とたのむ君に、たいめせむをりのかたりくさにせんのみ。

(廉資王母)

人の子の親になりてぞ我が親の
思はいさゞ思ひしらる

雑報

●華族女學校幼稚園のことに就きては、はやく報導しまゐらしゝが、今、また、その保育要旨といふもの、及、それに就きての細川仝校長の演説を得たれバ、左に掲ぐべし。

本園保育の要旨は、幼兒の身體能力を、知らず識らずの間に、自然に發達せしめ、併せて、幼兒の知徳を暢發涵養せしめて、家庭の保育を補ふに在り。

幼兒の知徳を暢發涵養するは、天産物、及、人工物などに就き、遊戯娯樂の間に、天然の美を知り、妙を覺り、高尚優美の精神を煥發せしめ、其の名稱、性質、効用等を辨へしむるを要す。又、繪畫、唱歌、談話等の方法に依り、篤厚淳誠の氣風を養成し、忠孝の精神をも鼓舞せしむべしと雖、過激ならんことを避け、又、常に、行儀作法を習はしむるに至りても、勉めて強要する事なく、唯、不良の習慣に浸染せんことを防ぎ、自然と、秩序を重くし、禮儀に厚からしむるを要す。

幼兒の談話は、發音を正確にせしめ、俚語、訛言、すべて、卑陋なる用語は、勉めて、之を避けしむべし。

幼兒身體の發育には、最も注意して、常に、心性の快樂、動作の快活ならむことを要す。故に、

自由遊嬉の運動を制する事なしと雖、唯、危害なからむため、充分に監護するものとす。

幼兒は、年齒に應じて、各自使用する玩具、器物を、淸潔にする事、大切にする事、保存する事、排置する事、出納する事等を習はし、又、取扱ひ方、取纏め方等に慣れしむるを要す。

幼兒の保育、及、管理の表準は、專、之を、學校に則らずして、完全なる家庭に取るものとす、故に、保育、および、管理の方法は、母の心を旨とすべし。

凡、幼稚園は、學校授業の方法に倣ふべきものにあらず。故に、幼兒の年齒に應じて、階級を分つと雖、必しも、一組の幼兒をして、ある程度まで、一齊に進達せしむるを要せず。凡べて、幼兒の知見の及ばざる事柄、或は過多なる課目を授け、又は、强ひて、業に就かしむべからず。

幼稚園保育始に際し同園兒童の父母親戚に對する細川學校長の演說大意

幼稚園は、幼兒を保育する所にして、學校とは、別種の者なりと雖、學校と併置するを以て便なりとす。假如ば、一つの學校に通學する男女子の弟妹あるときは、兩人、同車にて來去することを得べく、附添の人も、亦、一人にて足るべきを、若、兄姉の通學する學校と、弟妹の保育を受くる幼稚園と、隔離せる所に在らしめむ、各別に、車を要すべく、附添人も、亦、二人を要すべし。此度、當華族女學校に、幼稚園を新

設せるは、全く、此必用に起れる者なり。此事に付いては、夙に、此説をなす者あるを聞きたりしが、近日に至りては、本校の生徒の父兄に於いても、大に、其必要を感せられ、其筋へ、内々建議せしこともありき。然るに、本校の建物に、幼稚園に充つべき所なく、本校の地所も、亦、幼稚園を新設すべき餘地あることなきを以て、其説は允當なれども、之を施行するに由なかりき。某が、本校長兼務の命を受けし時は、恰、宮内省より、隣地黒木氏の宅地を買收せられたる際にして、幼稚園を新設すべき場所を得たるを以て、直に、宮内省に稟議し、新に、幼稚園を開設することゝなれり。新築の建物は、數月の後に非ざれば、落成すべからざる故、假に、此教室を代用して、今日より、保育を始めたり。

幼稚園保育の法は、「フルーベル」氏の首唱せし以來、漸、諸國に行はれ、我國にても、此法を施行すること、已に、年所を經たり。其法は、外國より輸入せる者なりと雖、實際の經驗に由りて、漸次、改良する所ありて、今日にては、殆、我邦固有の者の如き體裁を成さんとす。但、世人は、幼稚園の設ある所以を曉らず。且、動すれば、之に、過分なる價値を付し、小學豫備校の様なる者と思ひ、多少、學藝の初歩を授くることゝ思ふに至ることあり。此、全く、誤解にして、若、果して、此の如き者とするときは、余輩は、決して奬勵せざるべし。何となれば、

幼兒身體精神發育の度に於いて、此の如き事を負擔するは、天然の許さゞる所にして、小兒の學齡を定むるが如き旨趣に反すればなり。

然らば、幼稚園の効用如何なる者なるかと曰はゞ、大略、體育を主とする者にして、智育、德育も、之に伴隨する者なるべし。幼兒の身體は、尤、脆弱なると同時に、發育機の、尤盛なる者なり。譬へば、一歲の幼兒の身長六十六「センチメートル」即、二尺一寸七分八厘、三歲の幼兒、九十九「センチメートル」即、三尺二寸六分七厘、十歲の幼兒、百三十二「センチメートル」即、四尺三寸五分六厘となるを見ても、其發育の盛なるを徵するに足れり。此の如き時機なるを以て、力めて、其發育を妨げざる樣に注意せざるべからず。此の注意を怠るときは、幼兒の身體、脆弱となり、他日、百般の業務に堪へざるのみならず、學校教育を受くるにも、亦、不十分なるべし。幼兒、入園の時機に當りて、體育を主とするは、之が爲なり。而して、智育、德育の如きは、決して、輕々に看過するには非ざれども、只、其種子を蒔きて、他日の發生を待つに過ぎず。

世の開明に赴くに隨ひ、分業の法、漸行はれ、何事にも應用するに至れり。世の中に、親子の愛情ほど、親密なる者なきを以て、家庭に於いて、親子の愛情より生ずる教育をなすときは、事、之より善きは莫かるべし。然れども、社會の人事繁多にして、父母たる者、自、教育の勞を執るに遑

あらず、學校の教育、之が爲、必要となれり。幼兒の保育も、之と同じく、父母、其勞を執る能はざる者、大抵、皆然り。若、之を、教育もなき婢僕の手に委するときは、如何なる弊害を生ずるも測るべからず、貴族の家に在りては一概に論ずべきにあらねども、固より保姆たるの資格を具へざる人多きを以て、舊習に拘泥し、幼兒を過度に束縛するか、否らざれは、幼兒の意思に放任して、別に誘導すその方法を知らず、遂には、夫人の子を賊はんとす、當今は、幼稚園の設ありて、之が保姆たる者は、素より、教育ある人にして、且、專、幼兒保育の方法を研究して、其事に練達せる者なり。加ふるに、各種の天然物を具へて、幼兒の耳目を娯しましめ、適當の餘地ありて、幼兒の身體を運動せしめ、危險の虞なく、惡風に染むことなく、而も、多數の幼兒相集りて、游嬉歌舞すること等、幼兒に取りては、如何に、其快樂を感ずべき。此の如きときは、健康の身體となり、健康の精神となり、健康の精神は、健康の身體に宿ると曰へる格言に適合することを得て、男女の幼兒は、他日、適當の教育を受くることを得、又、各、其材を成して、家の爲、國の爲、有用なる人物となることを得べし。

●感ずべき少女　岡山縣兒島郡大門村赤木篤太郎の女そのは、今年十三歳なるが、生れつきいとさかしくて、容姿端しく、言語優しく、夙に、尋常小學の科を卒へて、高等小學に入り、學校にありては、能く教師の教を守り、家庭にありては、

能く、其の禮節を愼しむこと、なみ〳〵ならずとぞ。去年の秋の頃とか、その母病に罹りしに、そのは、母の兼てより祖母に心おきするを思ひて、己、介抱に力を盡くさでは、不自由も多かりなんと、卽て學校を退きて、枕邊近く、居て、醫藥を調へ、飮食の事など怠なく、いとかひ〴〵しく侍きける。且、毎朝早く起きて、岩崎神社に詣で、、母の平快を祈りき。或時、母は梨を求めけれど、その、又、祖母に心おきせんことを恐れ、祖母には告げず、己の貯へし錢を以て之を購ひ求めしめて進めんと、人を數里隔ちたる所に遣し又、岩崎神社に詣でしに、母の病俄に危篤に迫りしかば、急ぎてそのを召したり、歸れど、最早歸らぬ人となりにける。旣に求來つる梨も、遂に進むるに由しなかりき。そのが此の時の悲みは、實に言はんかたなし。さて、其の後は、常に心を家事に配り、其の身の裝飾などは、少しも華麗を好まず、家の豐かなるに、能く質素に守り、家業の暇には、書籍をも繙きて、夜は、岩崎神社に詣て、其の祖父が此の社の司なるを以て、其の許にて、安否を伺ひし後は、書の話など聞くを常とせり。斯かれど、其の父も、そのが行を憫み勞りて、愛養ふとぞ。其の年の幼稚なきに、斯く孝行の心かけ厚きは、そも、其の生れつきの人に勝れたるに、家庭の訓の最其の宜きを得たるならんか。

●果せる哉　女鑑第五十六號雜報欄内に揭げて、はやく、諸姫に紹介したりし熊本縣向卿女學校長内藤十郎氏等が、井上文部大臣に差出だる

たる裁縫科意見中に見えたる宮城縣仙臺市元荒町朴澤三代治氏は、本月五日、賞勳局に於いて、公益を興し、廉を以て藍綬褒章を下賜せられたり。朴澤ぬしが、大なる功を、裁縫の上にたてゝ、褒章を得られたるは、實にさるべきことなり。而も、その事がらは、固より、世の爲に圖られたるなれど、直接に、諸孃の上にかゝることなれバ、諸孃、および、吾人の、大に慶賀すべきところなりとす。また、次にかゝぐるは、その折の褒章のことバなり。

宮城縣士族　朴澤三代治

夙に裁縫術を修め職を本縣師範學校に奉し傍ら松操女學校を私設して專ら女子に裁縫科等を教ること茲に十有七年從來裁縫教授法の迂遠なるを慨し刻苦研鑽許多の女子を一室に集め實物に賴らす模型を以て一齊に傳習する一新法を按出し教授簡明他の學術と異ることなきの効を見る是に於て名聲籍甚遠近來り學ひ卒業せし者一千二百餘名公私の學校に從事する者七百餘名の多きに至る其他裁縫教授書及掛圖を著作する等洵に公衆に利益を與へ成績著明なりとす仍て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す

●金圓下賜　本月二日、賞勳局にて、篤行卓絕の廉を以て金圓を賜はりしは、富山縣の田中りと云へる婦人なりき。その辭令は、左の如し。

富山縣越中國礪波郡四五位村大字土屋村田中吉次郎母　りて

資性温順母に事へて孝夫に事へて貞夫羸弱多病にして耒耜を執る能はす躬自ら耕耘に服し母の眼病に罹るや藥餌療養怠らすさ雖も遂に明を失するに至り夫も亦尋て亡す遺孤累々艱苦を極むるも毫も屈撓せす承歡倍力め朝は母を負ひて佛寺に參し夜は牀蓐に侍して老軀を温め起居眠食意を盡さゞるなく嫠婦の身を以

て或は佃作に或は賃業に孜々として生計を營むのみならず又能く子女を撫育し一家を保持すること十有餘年一日の如し郷閭歟て其至行を稱す洵に奇特とす仍て其賞として金十五圓下賜す

●年酒會別會　先號に掲げたりし諏訪忠元氏の別會のをり、當坐探題の歌、並に、その競點は、左の如くなりきと。

當座競點

天　鈴弘甲　鈴重乙　千野眞艸

椿

ふくとなき春の風にもちからなく

はろ〳〵とちるたまつばきかな

地　鈴重甲　鈴弘丙　諏訪忠誠

春舟

隅田川かすめるはなにいつこども

さゝて棹さすふねののどけさ

人　弘猷乙　清矩丙　鈴木重嶺

岡躑躅

つゝじさく色なつかしくみつるかな

むかしゑのふかをかのへにきて

佳調　清矩甲　諏訪晴子

菫

乙女子かめてつゝつめるゆかりにや

わかむらさきにすみれさきけり

清矩乙　鈴木弘猷

春人事

春はたゝ花よりはなにおくかれて

ひともてこてふのたくひなりけり

重嶺丙　小中村清矩

澤春駒

はるもまたあさ澤小野のはなれこま

もゆるをくさやこゝろひかるゝ

海邊歸雁　増山深雪子

からろをす音かときゝしかりのこゑ

うみへかすみてかへるゆふくれ

雨中山吹　増山正治

ふりしきる雨にもぬるゝやまふきの

をつるまつくもこがねいろかな

原雉　水野　忠敬

うら／＼と霞たなびくまくすはら
あしたのどかにきゝすなくなり

松間春月　大河内一子

おひしける松の木の間のはるの月
かすめるかげもあはれとやみん

杜若　櫻井　倚保

色さへもわかぬといひしやみのよに
おもかけみせてさくあやめかな

岡早蕨　荻野みさ子

たつねてもをりやゐなましかた岡の
おどろかしたにもゆるわらびを

夕雉　後藤かね子

春ふかくゐてのわたりの夕まくれ
ほろゝこゑしてなくかわつかな

深見艸　諏訪　忠元

なつかしき色にさきたるふかみくさ
なれこそ花のおはきみにあれ

特に諸嬢に告げまゐらす

世の諸嬢が、月に二度づゝ、兼題歌文を寄せらるゝは、眞に喜ばしきことにて、大に謝する所になん。さて、之を謝すると仝時に、告げまゐらすることあり、そは、一、期限、二、文字なり。すべて、兼題文歌は、發行日(五日廿日)の一週日前にわが編輯部に届かんやう贈らるべし。文字は、成るべく、鮮明に書きまゐらされよ。歌文の、後れて届きたる、文字の鮮明ならざる、ともに、大に困ずる所なり。これらは、たとひ、秀れたる歌文なりとも、やむことをえず捨つることあり、いかにも本意なき限なり。あはれ、諸嬢、よく心し給ひてよ。

そへて告す、歌文兼題は、はやく定めて、女鑑第五十二號の附錄とせり。入用の諸嬢は、郵便切手五厘そへて申し越し給はゞ、直に送りまゐらすべし。

教の庭

五月廿日兼題　卯花

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天

消えぬ雪くもらぬ月やゆふぐれの
卯の花がきのさかりなるらん　府下芝區三田四國町　師岡千代子

地

見るたびに身に寒からぬ雪かとも
おどろかれぬる庭の卯のはな　府下赤坂區一ツ木町　羽田三緒子

人

夕月夜木の玄たかげはくらけれど
うのはな垣は暮れんともせず　府下牛込區市ヶ谷田町　大屋丙子

消え殘る雪かと見えて咲きみてる
うのはな寒きあさばらけかな　石井德子

むら消の雪とみるまでやまざとの
垣根またらにさけるうのはな　永井さい子

世の中をよそにへだつるまさ垣に
みをうの花の咲きぞみだるゝ　北川さだ子

時ならぬ雪かとおもふ玄づが家の
かきもたわゝに咲ける卯の花　内田慶子

ほとゝぎす今やなくらん我やどの
垣のうのはなさき初めにけり　内田雪子

有明のつきのひかりとまがひしは
かた山かげの卯つぎなりけり　高木こう子

咲く花の雪にまがきはうもれけり
ゆひしうつ木は少なけれども　高木すゝ子

卯の花の咲けるあたりは暮れ兼て
ねぐらをとめぬ鳥もあるらし　土生清子

世をうしと思ひへたつる玄ば垣に
あな卯の花の咲きいでにけり　上野銀子

卯つき咲く垣根つゞきの色みれバ
くまなき月のこゝちこそすれ　高井　米子

月かげはまがきばかりに殘るかと
うたがふまでに咲ける卯の花　羽田たか子

むら〳〵と咲ける垣根の卯の花
殘れるゆきと見えにけるかな　片岡　光子

寒からぬゆきと見るまで眞白くも
にはの垣根にさけるうのはな　江馬　信子

夕やみを忘るゝバかりたどりきて
うの花ざかりみるもさやけし　神田まづ子

賤のめがさらせる布と見るばかり
ゆくての垣にさける卯のはな　溝口奈保子

卯の花のさきつゞきたる垣根には
やみにも月のてりわたるなり　神田　春子

賤が家にさらせる布と見えつるは
うの花さけるかきねなりけり　久保田律子

卯の花のさけるさかりは夕やみに
みちゆく人もまどはざらまし　諏訪　晴子

あづさ弓春のすぎにししるしとや　伊達富貴子
庭の卯のはな咲き初めにけり

時ならずふれる雪かと見るまでに
かき根ながらに咲ける卯の花　水谷　清子

夕されど小野のほそ道見わかねど
うの花のみはしるけかりけり　菅谷こう子

手折りきて床にさゝんと思ふかな
にはのかきねにさけるうの花　菅谷とく子

谷かげに一むらさけるうのはなは
きえのこりたる雪と見えけり　瀬戸さと子

忘られぬ春をへだてのませがきに
おもしろ〳〵とさけるうの花　馬島久仁子

ほとゝぎす初音もらしゝ夕べより
垣根ましろにみゆる卯のはな　佐藤　敬子

天の戸のおしあけがたの山ざとは
かきのうのはな月にまがへり　佐々有鄰子

たどり行く人やいづれと迷ふらん
咲きかくしたる道のうのはな　德永萬壽子

白妙に咲きにほふなりうのはなを
またも來てみん山かげのさと　澤田　春子

ほとゝぎす初音ゆかしと小簾卷て　小橋　幹子
垣根もやへににほふうのはな

卯花はさきみけらしなしめゆひし　平塚千代子
まがきも雪のやまと見るまで

雪とみて立ちやよらましやま里の　千々波橋子
かきのうの花さきのさかりは

卯の花のにほふさかりは繕ろはぬ　河野　文子
しづが垣根も見るべかりけり

消え殘る谷間のゆきとひとや見む　野尻　鶴子
うのはなにほふ賤がかき根は

夕ぐれのともし火いそぐやま里に　平野　君子
はや咲きそめし庭のうのはな

ほとゝぎすなきつる聲に見出せば　師岡ちか子
庭の卯のはなさきそめにけり

雪とみてまなびのまどの友とせん　羽田千世子
かきねましろにさけるうの花

茂りあふこずゑをもるゝ月かげに　河田いし子
まがひてさける垣のうのはな

ふる里のあれしまがきも卯の花は　藥師寺芳子

昔へだてず咲きぞにほへる

立ちかへり手折てゆかむしら波の　八太　光子
よすると見えし垣のうのはな

木の間もる月の影かと見いだせば　横山須賀子
ゆふやみ白しかきのうのはな

夕やみの垣根しるけきつきかげは　横山　柳子
ゆめにもあらでうつ木なりけり

夏木立しげれるなかのうのはなは　花山やすゑ
まだ消えあへぬ雪かとぞ見る

時ならぬ雪と見るまでましろなり　花山きのと
うつぎの花のさけるまがきは

夕やみに川ぞひうつぎながむれば　碓井　信子
おとなき浪とあやまたれけり

卯の花のさかりに咲ける垣根こそ　碓井たけ子
ときもわかたぬ雪と見えけれ

咲き匂ふうつぎの花をわけゆけば　碓井わか子
あやなく道ぞふみまよひぬる

つき影と見しはひかめか卯の花の　內藤　濤子
咲るあたりはやみともなし

玉川のきしべにさける卯のはなは　渡邊　益子
よるもさらせる布かとぞ見る

園のうちみどりけたれてみゆる哉　大橋　兼子
ゆきかとばかり咲ける卯の花

夏のきてみどり色なる園のうちに　日下さた子
けふめづらしくさけるうの花

白妙のうのはながきを見わたせば　西澤あい子
ゆきのつもれるすがたなり鳧

寒からでまがきは雪にうもれけり　昌岡　豊子
いまをさかりのうのはなの庭

忘れては月夜むかりとおもふまで　大橋てい子
ゆふやみしらぬ垣のうのはな

埋もれて世にふれむにそうの花の　鹽井　長子
うらなく雪と見なまがふらむ

卯の花に賤がかき根はうもれけり　松田　靜枝
ゆきはかくまで積らざりしを

山吹のこがねあはせてしろかねの　松田いし子
うのはな匂ふたまかはのさと

卯の花のさけるわたりは更てしも　松田　孝子
みしかき夜半を明け急ぐなり

村雲のつきかげおぼろをり〳〵は　橋本かすゐ
いよ〳〵白しあさのうのはな

うは玉のやみとも知らず迷ひきぬ　植木　鋼子
卯の花さけるかき根つゝきを

ひるは雪よるは月かとみゆるまで　宇野さく子
色をかしくもさける卯のはな

我せこがころもを春のはころびて　吉田　芳子
そでがき白くさける卯のはな

寒けくは雪となからむゆふつき夜　横敷たか子
そでがき白くさける卯のはな

昨日けふ夏やたちけむぬきかへし　伊藤みさと
さまにも見えてさける卯の花

夏ごろもまたぬぎかへぬ賤か男か　吉田たけ子
かき根しろにさける卯の花

我が窓を照すはゆきのそれならで　小林てい子
さく卯のはなの光りなりけり

こゝろなき賤が垣根もこのころは　土山八重子
をかしき迄に卯つぎ咲きけり

空蟬の世をしいとひて卯のはなの　小林　良子
なつをよろにも匂ひぬるかな

世と共に浮きつ沈みつうちよする　坂口しん子
なみかと見ゆる岸の卯のはな

音のせぬ波と見えつる卯のはなは　橘　雪江
おとに聞えしたまかはのさと

我ながらあざむかれけり卯の花を　坂口すゑ子
なみと思ひてそでぬらすまで

立ちこめる木の下やみも卯の花の　宇多田揚子
さけるわたりは迷はざりけり

うつ木さく姨捨山のゆふぐれは　伊藤かをる
月のひかりとあやまたれけり

吉野山さくらはとくにちりはてゝ　田子きく子
なほ卯の花をゆきかとぞ見る

吾せこが張るやころものしろ妙に　浅井みさ子
さきいでにけり垣のうのはな

初瀬川かは邊にさける卯のはなは　浅井すか子
おとなき波とあやまたれけり

白たへにゝほふ垣根の卯のはなは　青木　春子
よの憂きふしもしらず顔なる

よひの間の月のひかりと思ひしは　茂木　花子
まがきにさけるうつきなり鳧

時ならぬ雪かとばかり咲きうづむ　北川　銀子
溪のうつ木にみち絶えにけり

玉川のたまちるなみのしがらみを　山崎緒重子
きしにもかけてさける卯の花

神まつるうづきの花はみつがきに　山崎しま子
かゝるふゆとも見えにける哉

五月やみこの下かげもつきの夜と　山崎とね子
わかぬばかりにてらす卯の花

玉とちる浪かと見えてたきつせの　鈴木　榮子
いはほのかげにさけるうの花

降り積る雪かとばかりまがふまで　田島ひつ子
かきの卯の花咲きみちにけり

おしなべて緑あらそふにはの面に　伊東あや子
しらゆふかくるかきのうの花

山の尾に霜やおきぬと詠むれば　岡　佐波子
あさ日にうつるうつ木なり鳧

足ひきの山の尾しろくふるゆきは　岡　かつ子
さかりに匂ふうつ木なりけり

うしと見し世となりぬれど君が爲　三木ちと子
こゝろはいろにさけるうの花

荒はてし宿のかき根の卯のはなは　下田まん子
たがぬぎ捨しころもなるらん

有明のつきのひかりのしらめるは　土屋てい子
うの花がきのゆきなだれかな

夕やみを照らすまがきの卯の花は　新藤ひさ子
月のかつらの種にやあるらん

うつ木花さける山邊を見わたせば　城取まさ子
夏も消えせぬゆきかとぞ思ふ

雪かとも見まがふ迄にさきにけり　笠原よし子
かき根につゞく里の卯のはな

夕月夜おとなきなみとおもひしは　木下ゆき子
卯の花さけるかき根なりけり

行きくれて野邊に出れば卯の花の　小原さと子
かき根さやけし夏の夜ひかな

人氣たつ世を卯のはなと思ひてや　淵井とみ子

はるに遅れて咲き出でにけり

玉川のきしに咲きたる卯のはなは　柴　ふさ子
おとせぬ浪のかゝるかと見ゆ

音羽山またおそざくらちらぬ間に　伊藤くめ子
はや卯の花のなつは來にけり

山ざとの卯の花ぶきのかりいほは　大槻かをる
よをこめながら明くるなり鬼

卯の花のさける夜ごろは闇もなほ　日野あや子
垣根にゆきのふれるかと見ゆ

卯の花のさきみちにたる山ざとは　市川みね子
いとゞ日長きこゝちこそすれ

ほとゝぎすなきかへりたる籬にぞ　樋口ちへ子
卯の花しろしいはかげのやま

卯の花も雪と見まがふつき夜かな　井澤やす子
吉野のやまのいはかげのみち

木の下の暗くもあらじ卯のはなは　井澤しく子
闇の夜てらすつき夜なりけり

世をうしと片山ざとにすまひしに　熊谷あや子
わが身さちなし垣のうのはな

白妙を引きわたしたる卯のはなは
　さす月かげにひかりますらん　倉田かず子

玉川のきしよりきしにさきみちて
　白さいやますはなうつぎかな　小松みさを

散り殘る花かと見れどおもひきや
　枝もたわゝのうつ木なりけり　征矢みつ子

五月廿日兼題　畫を見る記

天　府下芝區三田四國町　師岡千代子

上野の列品館の内に開かれたる美術展覽會繪畫の審査終りて昨日褒賞授與式行はれつと聞きて妹を伴なひて見にゆきつ例のうるはしく列ねられたり數多の日數と心とをこめて畫がかれたるいづれかめでたからざらんまして賞牌賞状を得られたるかしこきわたりの御用品となりぬる此上なき名譽になむ課題は孝と秋雨と菊となりとぞ秋雨の淋しくあはれなる菊のいろ〳〵匂ひ出でたるいづれをいづれとはあらねどなほ孝の繪ぞ殊に身にしみて覺えぬ小松内大臣橘逸勢の女曾我の兄弟微妙の舞の岡など見るまゝに我身を思へどやさしき事多くなむ終のほどに武村耕靄先生の物せられたる寛政の孝女さよ子の繪あり下つ方に畧傳様のものありそを見れどさよ子は江戸の人にて父母ともいたく年老たるに父は盲目となり果てゝ耳の樂ならでは慰むべくもなければさよ子晝は近きあたりの女兒どもをあつめて書よみ手ならひたちぬひの事など教へて家の業をたすけ夜は父母の許につかへて古今のくさ〳〵のものがたりさては好める琴など掻きならして慰めしとて上つ方には琴ひきて父母のきゝ居るところ下つ方には兒等に物をしふるところ覺しらず愛痛くかきなしたる見るから涙止めあへず御用品となり褒状得られたるもうべなりけりあはれ今日よりはこのさよ子を本として我も父母につかへまつらばや妹にも知らせてと見れど居らず如何にしつるを待つにとばかり有りて喜び給へ勉一ぬしは幼年の部にて褒状賜はりて御用品となりぬといふ勉一とはおのれらのいとこなり佐竹永湖先

生の祕中にて永州十二年とあるぞやがてそれなりけりそのよしやあしやは知らざれどその書ける姿老の孝子にちなみていかに親たちの悦びつらんいかにぬしのいそしみはげみけんと思へどいよゝ我身のやさしさ限りなくて露のこぼれぬべき菊の色香もあはれの限なる雨のけしきもたゞ袂のひちまさるのみなれどやがて參考室の御物を拜みて家路にといそぎかへりぬ

地

府下本所區中の郷業平町　八太光子

ふるやと思へどやみやむかと見れどまた降りいて雲のゆきゝも定まらぬよ柴の扉もとざしかちにて交の林を分けつゝも見ぬ世の人をともとして明し暮しつるがけさはめづらしう雲間見えそめ花やかにさし入る日影も日頃のうさをなぐさめ顔なれど久しく音づれざりし友がり行きぬつれ／＼なる折からよくぞきませしとてくさ／＼の物語のついでおのれかねて繪を好み侍るが此頃かゝる物をなん得つるいざ見給へといひつゝ一卷の絹をとうでつひらき見れど田家の秋景なり色付たる田の面の實りゆたかなるは引板の音におどろかされてむれたつ雀のいと多きにも知らるかし細きあぜ道を思ふ事なげにけぶりくゆらせつゝ馬引きゆくは家路に歸るにやあらん小川に渡せる丸木橋の上を鍬ひきかたげて行くあれどはるかあなたの山路より里のうなゐらの打むれて大なる籠をせおひ熊手とかいふものを持ちて來るは落葉かきにゆきしなるべし梢あから色付きたる木立ちのひまよりわら屋はの見えて夕げのけぶり立ちのぼりたるねぐらにいそぐ村鳥の三つ四つふたつ飛び行くなど自づからなる夕暮のさまをうつしたるはげに終日打向ふともあくであるまじうかつ見かつ愛でゝ日の傾くも知らざりしが入相の鐘よおどろかされてをしき別れをつげ家に歸りしは山の端いつる夕月の中空なるころになんありけるやがて燈火にむかひて猶目の前に浮ぶけしきをかくなむ

人

長野縣長野町　吉田たけ子

をちの高ねは村雲に半かくれは山より落ち來る瀧のさむけき流れの末は鏡なす池の汀に入りぬ此方の動きなき岩かねに腰うちかけて釣たるゝ翁ありけり其人のさま頭には雪の如き髮をうなじにたれ胸先にはみるの如きわゝけし髭をうちなひかせぬいとも〳〵いうなる翁かな如何ある人ならむと其名をとへと一言のいらへもあらず我が言の通はぬにやと見れバいらへせぬもうべなりこは黑の色もてかき流したる寫ゑなりけりあはれいみじき筆なりや

菅谷こう子

筆もて物のかたちをかき得ぬ人にても目に見てはこゝろにうつさぬはなかるべし目にかたちを見て心にこれ　うつすは書のうまれいづる時なりとか心に象を描て手よこれをうつすは畫の人になられる時なるべし畫を好み愛するは人にそなはれる天然の性なり畫にもろ〳〵の流派あれど一日光琳文晁北齋是眞歌麿豐國玉山一蝶らのかゝれたる畫を見しに其細巧をつくせるのみならず故實を明にし筆の勢の絶妙なるまことのものを見またまことのものに逢ふ心地してたくみなることたとへんすべなくはむることゝばをしらず此頃洋畫を學ぶものいと多けれど是等の畫にはかけて及ぶべくもあらずわらは學の会にありし時を懷ひやれバ手習草紙の半は人の首鳥狗の形もて塗りけることもありけりこの名だゝる畫しもはじめはかゝるたはふれしたる群なるべけれど妙想奇匠のいづる所つひにはのちの世に畫伯と仰がるゝまでなりにけりこれ心に象を描くことのたくみにして手に筆を運ぶことのたくみなりしゆゑぞかしあはれこのめでたき畫のさまを見たれど描き筆にはそれしるすとのならされど只畫しの名をのみしるして其記とはなしつ

佐々有[illegible]子

大御代の美術ともてはやさるゝ繪畫は大和にからに西洋に種々のながれはあれどもちはやふるかみつ御代より朝廷に巨勢金岡などいへる畫師ことにいともいともかしこうるはしう鳥に花に山に野に

月も雪も後の世人のかけても及ばぬ力になんありけれども〳〵昔のことは素を後にして心の柱ふとくたくましうつきたてゝうき世の風になびくことなくなまさかしき姿にならはで富士のねの高く近江の湖のまさやかに朝に夕に硯の海のうむことなく筆の林の奥がをきはめてうつし出すべきものになんあなめでたあなうるはし

昌岡　豊子

五月雨の空にも似ず今日は朝とく晴れわたりて日影うらゝに皆人もそゞろありきすなるを終日たれ籠め暮さんも心うけれバへだてぬ友垣二人三人うちつれだちて隅田のわたりの若葉を見すぎにし春のむかしを語り言問の堤の風に「いざことゝはん都鳥」と詠せし人の親の心も今の世の親の心も子を思ひたまふ情の程は同じからんと身にしみてありがたしなどいひつゝ三圍白鬚のわたりまでもたづねつゝ余念もなく來かゝる折しも堤の下のさゝやかなる庭も荒れはて宿のやれたる竹すだれの風に吹かれて卷上る隙より床しくもまた慕はしき雪中常盤の掛地の表具いとあざやかなる見えたりいかなる名家の筆の跡にややつれし姿に松の操を留めたる貞婦のおもかげうつし出して生るがごとくなり友呼びとめて指さしつゝ此家の主婦の心の奥こそゆかしけれ幾百年の古事を傍への友として心の鏡みがき居る人ならん所から名もきかまほしあなゆかしき人の住家や入りて柴の戸おとづれてん

吉田　芳子

白雲に半かくれたる高ねも日陰うとき谷の奥まりたるさまさてはかひ毎にさける花もまのあたりに集まり見えぬは山より落ちくる瀧つ瀬は見る心さへ寒けく波打つ岩まをめぐり〳〵て末は鏡なす池のみぎはに入りぬ此方なる岸の岩かねに腰打ちかけていと樂しげに釣たるゝ翁ありはるかあなたの遠き流れにそひてさし下す筏士の浮きつ沈みつこぎもくありさてもかくはかり墨の色もて遠近のけぢめしるく呼べむ答へなむむかりの翁世渡る人の習ひとて漕ける筏士など眞に迫りてあざやかに書き流されたるはいとも〳〵巧みなる筆のいきはひ

になむ

松田靜枝

當世に後れて物まなぶ賤が身はやむごとなき令孃たちに交はるべきつてもなく獨り柴の戸に遠きむかしを忍びてあはれ紫式部を心の友とたのむのみ今年五月七日妹とゝもに中の島なる招魂祭を見てその歸るさ博物館に入りぬ日頃繪を好む心の堪へがたくて先づ美術室に入れば光琳谷齋景文一蝶など古今名家の丹青處せきまでつらねられたり元より古を好む身のいとゞ古畫のなつかしければ片はしより見もてゆきつゝふと片隅を見れば絖地に彩色もなく只濃く淡く墨もて紫女の源氏を草するかたかけるありゑがきし主は誰れとも知られねど古色あふるゝばかりの大幅なりあはれ夜となく晝となく心に慕ふ紫女の面影いま眼の前に見る心地してゑがきし主の我とひとしく紫女を慕へる畫工ならんと思へば二人なつかしくて身は美妙の音樂にうたれたる如く足は一所に止まりて動かずしばしありて妹が袖ひくにおどろきて心をあとに殘して立去りぬ

それよりいくつかの室をや經にけむ幾百幅の畫をや見たりけむ水彩畫のいかなりしか油繪のいかなりしかを知らず家に歸りても紫女の面影のみ心にうかびて此の夜の夢にさへ見えければその由をかきつくるになん

宇多田揚子

今女鑑六十一號口畫を看るに高橋松亭氏の筆せる者にて勝子の稻葉山叔父のもとめを訪ふの圖にぞありける年月宮仕せし岩倉城を後にして別れ惜げに見返りつゝ行く勝子の優にやさしき姿又老僕のしとやかなる風一見して其の昔のさまの思ひ起さるれいと床しう覺えぬ嗚呼實に畫ほど其の眞を寫し情を動かすものはあらずなん

伊東あや子

一日春さめのふりいでゝいとものしめやかなればひねもすたれこめてのみゐるにつれ〲たえがたければ畫卷物あまた取り出で、其中の卷一を先づうちひらけばいにしへのかしこき御あたりのあり

さまをうつし出せしものになんありけることはよきものなりと打よろこびてみるにはしめの圖はたちばなひめの夫尊にかはらせ給はんとてちひろのうみに入り給ふ所をうつしゝなり颶やすさまじき浪の勢ありやうき御舟のありさまみる目もくるめくばかりなりさるにても女は此心なくてやはとおもふにまた御心の内いかにおはしましけんと共に消入る心地ぞしける丶次に神功皇后のをゝしき御姿をみ奉りてはますらをにもまさり給ふ御心をかしこみ正行の死を止めてねもころに敎へらるゝ正成の室の圖をみてはかゝる母君のありたればこそなどおもひめぐらしあるは九重深き雪のあさけのふるまひあるは石山寺の月かげをうつしけんきよき心などつぎ／＼にみもてゆくに彼に櫻のいろあれど此方に梅のかをりありてとり／＼に愛でたからぬはなけれどしづの小田まきくりかへし／＼あるはかなしみあるは嬉しみあるはかんじわが身さながら畫の中に入りたらんとあやしくうつゝ心もなきをりから數奇屋の方に姉君の聲してよび給ふにおどろかされはいなさかぎりなけれどまたこそと卷きをさむるにものこりおしうてなん

岡　さは子

人は何事によらず見又は聞く每に各々相感ぜらるるものにぞあめれ中にも聞きたらんよりは見たらんこそいといみしう勝りてなん先づ日東都なる伯父君のもとより古き又は新しき畫幾多く送り賜はりたればいで如何なるにやとうからはらからまとひしてながむる中にも古き昔の大內の御有樣などはそゞろに昔の忍ばれていと／＼床しあるはかけまくもかしこき後醍醐帝の隱岐よりのがれさせ給ふ時恐れ多くもあやしの財にせおはれ奉りて海邊を行く樣など拜し奉りし時には一同袖をしぼりてけりあるは楠父子のさくらゐの別れ正行うしの如意輪堂の扉に和歌を殘し給ふ樣など皆哀れに悲し又人傳に聞き物の本などにて知り得たるのみにて未だ行きたる事なき天の橋立、松島、富士山日光山、さては外國の樣など見たる時には恰も其處に行きたる心地してうれしくて其がかたはら

に短き解などありしかばいよ〳〵身にしみて哀れにもをかしかりけりやがて見終りたる後も去ばし其話に時刻の移り行くをも知らざりき實にや居ながら其有様の見えて人を慰めあるは悲しましむるは書を置きて他にはあらじとぞ思はるゝされど近頃は外國人の皆之をめて求めて家つとにするも理りになむ

土屋てい子

畫はみる人の心によりて花鳥を好むあり山水を愛するあり漢土も日本も畫工の心をこめて物せるは山水のさまをみればさながら山人の栖に入りし心地ぞせらるゝまたかはよきをとめの姿にはいはず笑はざるを恨むも是れぞの道に妙なる所なるべし妾は山水こそいと好ましけれことに雨中のありさまは一際見所ある様おもほゆそは雲烟のたちのぼれる流の落ち下る勢ひまたえもいはれずなほいははあまた畫だくみの畫をみて是か品さだめせむはいとかたき事になむありけるたゞ好む所をよしみてよく愛するをこよなきたのしみとするのみ

兼題

- 六月五日
  - 歌……里早苗
  - 文……あらまほしき事
- 六月廿日
  - 歌……鵜川
  - 文……家庭育兒の論

餘芳

みちのつと（つゞき）

小池道子

波上はくもりたれど、あはぢしまは、手にとるやうに見ゆ。大御舟も、こゝを過ぎさせ給ひしなりとうけたまはる。暮れ行くころより、波、いたうあれたちて、なる神の音さへ聞こゆ。雨戸さゝせんなどいふまに、いよ〳〵ふりまさりて、さうじのうちまで、ぬれとほりぬ。露、いとふかくて、おなじ所にとゞまらせ給へるだにあるを、大御舟のうち、いかならんとおぼしわづらはせ給ひ、人々も安からず。

家のうちにありてもぬるゝ夕立に御舟いかにと打ちまどひつゝ」うしろの方を見やれば、松の木立、さやかにて、雨もあらず顔なり。こよひの爲に、電氣燈ともしたる也と聞こえあげつるに、打ちしぶく窓を明けさせて御覧ず。九時頃より、やう〳〵、靜になりぬれば、おほとのごもれり。

廿五日、てけよし。曉に、おきいてゝ見れど、風しづまりて、波ぢ、ほの〳〵としらみ行く、こよなう嬉し。

霧はれて波打ちなぎぬ大君の御舟のいかり今ぞあぐらん」。あはぢ志ま、さやかになる頃、御ひるのこと、つかうまつる。けふの空に、み心もはれさせ給ふらん、みけしき、ことにうるはし。いつの程にか書かせ給ひけん。

夢さめてみ舟のうへを思ふかなまひ子の濱の波のさわぎに」とあそばしてあり。

朝日、にほひ初めたるなみの上に、千鳥のむれたつさま、面白し。柳原權典侍、

見そなはす舞子の濱の朝和におまへちかくも千鳥たつなり」。北島權のないし、

ほのぐ\と明け行くそらにあはぢ島かよふ千どりの影も見ねけり」。望遠鏡にて見れど、明石の城、また、大み舟とゞめ給ひし小豆島など、かすかに見ゆ。けふは、渚ちかくあゆませ給ひて、石などひろはせ給へり。人々、あらそひて、うるはしきをひろはんとするさま、よそめには、をさなくみゆるなるべし。綱引、御覧ぜさせんとて、よべより、よういす。一くみは、あかき布にて、かしらをつゝみ、一くみは、黄にてつゝめり。はるかなる方より、こぎめぐりて、近づく聲、かしましきまでなり。からくして、引きわけたるに、めざましきたひなど、あまたかゝりぬ。聲聲にのゝしりて、もてまゐる。たとてふいをゝば、はせて御覧ぜさす。名もしらぬ

いをも、數しらず。こは、よべ、花火、打ちあげなどして、魚の、よりくるやうに、心しらひせられしなりとぞ。貴なるも、あまたかゝりたれど、ちひさければ、はえなし。小出粲より、歌奉れり。

あまの子がおまへにちかく引くあみにけふはもれたる魚やうらみん」。まつ原をあゆませ給ひて、松露といふもの、とらせ給へり。五色の布もて、柄をつゝみたるくまでもて、おの〳〵、すなご、かきさぐるさまぞ、かひ〳〵しき。濱人ども、いかにみるらんとをかし。こゝの岡の上なる有栖川宮のなりところにて、ひるの御まうけつかうまつる。こゝは、また、松原こしにみゆる波のけしき、いはむ方なくをかし。かの小豆島など、さやかになりぬ。

いつのまに沖の霞は晴れぬらむしらぬをしまのあらはれにけり」。はうらくしま、ゑしまといふ島なりとぞ。かのいをども、さるべく、てうじいでゝ奉り、人々にも給ひなどす。長き御たびのみともに、つかれつらひなど、かしこき仰ごと有りて、みきたまふ。日ごろの雨に引きかへて、波路の末さやかに、紀の遠山、打ちはれたる、いよ〳〵、心ゆくさまなりけり。

あまの子が小舟にのりてあはぢ島行きめぐりてもみまほしきかな」。すまでらより、敦盛の青葉の笛、矢に、巻物そへて御覽せさす。かたちのみは、なほのこれり。もとの所にかへらせ給ひて、産物ども御覽す。縣官も、謁たまはりて、五時三十分のきさにて、かへらせ給ふ。けふは、みともの車にのりぬ。海のけしき、あかずをしきものから、今夜は、都にとおもふ心のうれしさ、にるものなし。まして、内にのこり給ひて、つれ／＼と暮らし給ふ女官たち、ひと日も、千代の心ちして、まち奉るうれしさ、いかばかりならん。梅田よりさきは、はじめてのみちなれば、珍らしきところ／＼の多からむを、暮れはてたれば、かひなし。たゞ、雨にて、水かさまさりたる田のけしきのみ見ゆ。夕月のかげ、くろうなりたり。

山のはにかたぶく月のかげをみてよる行く道ぞさびしかりける」。まして、木間に、とり／＼みゆる火かげは、心細き住處、おもひやられてあはれなり。ともしび、かけつらねて、にぎはへる處にきにけりとおもへば、七條なりけり。

廿六日、てけよし。奈良、よしのゝみともにもれたる人々、思ふ方に、あそびにものせまを仰せらるゝによりて、小倉松のすけ、樹下掌侍、宇治にと出でたまへり。

かへり來給ひて、いろ〳〵の物語す。いと興あり。その中に、樹下掌侍、

舟子らにちからあはせてつかさ人ふねこぐさまのおもしろきかな」とよめりしは、まことに、けしきみゆるこゝちす。けふは、みな、打ちつどひて、めぐりつる處のものがたりして、なぐさもし、わらひもしつ、殘りたまへる人々、いかに、さう〳〵しう、ものしたまひけむ。さるをりこそ、まことの歌も、よみ給ひぬらめと、せめきこゆれど、小倉權典侍、雨のふりつゞく比、よみたまへりとぞ。

大君のみふねのうちはいかならむひと日もはれず雨のふるころ」。まぎれむ方なく、ながめ給ひにけむと、ことわりなり。出でたゝせ給へる時、樹下のないし、

出でましをいはひながらもさびしさに思はず袖をぬらしけるかな」。また、霧ふかくして、みふね、とゞまりましますときゝて、

おほきみのみふねうかぶる海原になど時ならぬ霧のたつらむ」。西命婦、

かれ殘る奈良山ざくらこの春はむかしの色にさきかへるらむ」。

よしの山花のさかりはすぎぬともにぎはひぬらむ君をまちねて」など有り。命婦は、ならの人なれど、故鄕をおもふ心の、ことに、あはれにおぼゆる。なほ多か

れど、さのみはとて、

廿七日、晴。前九時より、織物會社、高等女學校、二條城などへ、行啓なり。みともならねば、みわりさまはおらず。伏見なる水野はま子、とぶらひきたれり。わがをさなきより、つかうまつりし故御息所にさぶらひて、今はの御時まで、まめやかに、つかうまつりし人なり。そのをり、別かれつる後、はじめてあひたれど、まづ、かたみに、なみだにむせび、つきせぬむかしがたりに、時のうつるも忘られぬ。いまの御息所の、よにめでたきみこゝろばへにおはしまして、御跡の御とぶらひども、のこる處なく、せさせ給ひ、むかしさぶらひし人々も、へだてなく、あはれませ給へることなど、かたはしつゝ、かたりきかするに、昔の御德の、のこり給へるなめりなどいひて、またなく。

とふ人の多かる中にうれしきはなきてかたらふ友にぞありける」。津守權掌侍、あたご山にのぼり給へり。月輪寺の圖など、もてかへり給ひて、

時ならぬおくれの櫻わかばさし立ちよる袖にかゝるおらゆき」。

廿八日、晴、午時に大みけしきうるはしう還幸ましましぬ。今までさうさうしかり

つる宮のうち、きぬのおとなひ、人の行かひさへしげくなりぬ。宮をはじめ奉り、人々ゑみのまゆひらけて、御湯つかうまつり、おもの奉りなどす。軍人のいさましかりしことゞも、おもはすことなげにのたまはするに、をみなすらいさむこゝちす。玄海なだの波たかくして、御てう度なども、まろびたるよし、いかゞかりかしこかりけむと、更に身にしみてうかゞひ奉る。御たびの具よりとうてさせ給へるをみ奉れば、小豆島にて、霧のふかゝりし時の御製也。

　おもひきやあづきのしまのあさぎりにゆくさきみえずなりはてむとは。」廿三日にも、霧ふかくして、部崎にみふねとゞめけるとき、

鳴神のおともはげしく雨ふりて部崎のなみによをあかすかな。」侍従たちのもあるが中に、はり川の侍従、御まうけの物どもぐして、御先に出でたる船の、波あらくして、すゝまざりしとき、

　大み船すぎぬとあふぐ波路には身もあづむまでおもはゆるかな」とありけるをみたまひて、西四辻侍従、

　夕霧にいそぐ波路は暮れはてゝ君におくれし心をぞ思ふ」とあり。げに、いか

なることゝちかし給ひけむ。廣はた、田沼の兩侍從、まゐりたまひて、波あらかりつるをりのことゞも、宮にもきこえあげ、人々にもかたり給ふ。みな、たへがたきをりも侍りしかど、うへは、いさゝかも、かはらせ給ふこともましまさず。つかうまつることどの、かたはなること多かりしも、御覽じゆるさせ給ひ、行幸ましつるところどころに、おまねきおはひいつくしみの、なみ〳〵ならざりしことゞも、かたりたまふに、柳原權典侍、

　みゆきますあみちのすゑのかぎりなく君がみいつや打ちあふぐらむ」とよみたまへるも、ことわりにめでたし。平戸燒のみてう度、長崎の鼈甲細工のものなど、宮にまゐらせ給ひ、人々にも給ふ。御心ばへの、かたじけなく、ありがたさに、たれも〳〵、そでをぬらしぬ。

副島伯爵校閲
東久世伯爵著　松本楓湖畫

尋常小學修身入門　全一册　一册金二錢八厘

全　教師用　全一册　一册金七錢

尋常小學修身書　全四册　每册金七錢八厘

全　教師用　全四册　每册金十二錢

高等小學修身書　全四册　每册金九錢七厘

全　教師用　全四册　每册金廿五錢

尋常小學國史談　全二册　每册金十錢

高等小學國史　全三册　每册金十九錢

中學國史　全六册

發兌所　國光社

女鑑第六十二號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及郵送にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京[illegible]郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證差出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に郵税御添附の事○本誌掲載の寄書は一切受取不申候事

女鑑

定價	壹冊金十錢
郵税	三ヶ月前金五十五錢
毎月	半ヶ年前金[illegible]
五日	[illegible]
廿日	[illegible]一行[illegible]廿三字
發行	廣告一行金[illegible]十錢

明治廿七年五月十九日印刷
同年同月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）

（明治二十四年八月八日内務省許可）